

# 一八〇二年の Sitka の戦い (一)

— ロシアの Sitka 定住地 Михайловская крепость (Old Sitka) の Tlingits による破壊及びその原因と結果について —

岡野 恵美子

## 一、一八〇二年の Tlingits の対ロシア蜂起について

一八〇二年六月、ロシア領アメリカの事実上の建設者 A.A. Baranov が、ラッコを中心とする毛皮獣の極めて豊富な地域の中心にあり、将来のロシア—アメリカ会社の主拠点として一七九九年以降心血を注いで建設を進めて来た、Михайловская крепость (Old Sitka) は Tlingits の攻撃を受け壊滅した。これは孤立した事件ではなく、同年 Yakutat 以南で頻発したロシア人とその狩猟団 (группа) に対する Tlingits の攻撃の一つで、規模と影響の双方で最大だった。従ってロシア—アメリカ史研究では全体を「一八〇二年のインディアンの蜂起」と称するのが通例である。<sup>2)</sup>中でも、流血の惨事を伴うその悲劇性とドラマ性のためこの事件は、「The Sitka Massacre」とも呼ばれ、初期の研究以来多くの注目を集めてきた。近年のロシアの研究では「一八〇二年に平和的ロシア—Tlingits 関係が…インディアン達により激しく破壊された」<sup>3)</sup>あるいは「最も悲劇的事件が一八〇二年に発生した」と、ロシア領アメリカにおける原住諸民族の対ロシア人反乱との見方が強調されている。「ロシア—アメリカ史」第二巻がこれを「その規模でも結果においても全ロシア—アメリカ史上最大の原住諸民族の反乱行動であった」と評するのも同様である。<sup>4)</sup>またそれらは「北は Yakutat から南は Kaigani-Haida いたる原住諸民族・諸氏族の

反ロシア同盟形成をその動因とし、攻撃の計画性・組織性を強調する。<sup>5)</sup>これは H.H. Bancroft の「未開人達は彼らの計画を成熟させていた。同盟者は Alexander Archipelago の全つの村々及び the Stiklin River の人の居住する谷から確保された。そして一八〇二年の夏の間、一撃が加えられ、地上から幼児期のコロニーを一掃した」<sup>6)</sup>との主張と地域の相違はあるが、概ね一致する。ただし、A.B. Гринёв の主著の結論「一八〇二年の蜂起はほぼ一万人の住民を有する約十二万平方キロメートルの領域の原住諸民族を統合した全ロシア—アメリカ史上最も大規模なインディアンの反抗行動」<sup>7)</sup>は、反乱の規模の点で Tlingits 側史料の裏づけが必要であろう。Tlingits の口承伝承の文章化がその利用を可能としたからである。即ち一九五〇年代以降採集録音された「Tlingit oral traditions」(口承伝承)は、近年 Tlingits 出身研究者の参加の下、文章化と英訳が進展しつつあり、部分的には既に公刊された。この祖先の歴史に関して Tlingits 自身が伝承してきた記憶の記録には、一八〇二年と事件に関係する諸事実が含まれている。この多くが、二〇〇八年に出版された、一八〇二年と一八〇四年のロシア—Tlingits の戦いとロシア人のアラスカ進出を Tlingits の視点から再検討する研究書—史料集に収録された。この『…Russians in Tlingit America』は従来の研究(対象は主にロシアの研究。だが、Bancroft のそれを含む)を以下のように批判する。戦いの筋道はこれらの中で何度も詳述されるが、その基礎として多く用いられる、こ

の事件に近い時期の人々の記述が、間接的情報の性格が強い。従ってこれらを利用した十九世紀からソヴィエト時代（一九八〇年代以前）の研究書には「事実の誤り、誤った解釈そしてひどい紋切型表現が多くある」<sup>12)</sup>。次に、最近の研究（特にロシアの）に対しては、この欠陥の修正を進めたことを評価するが、アラスカの地域的諸状況に関する知識の欠如と「Tlingit oral tradition への接近」が不充分との理由でまだ不完全と見なす。とは言え現状の「Tlingit oral traditions」の対象は狭く、一八〇二年と一八〇四年の諸事件への「Sitka の The Kiksádi clan (the Raven moiety) の参加（この戦いの個別的原因を含む）」とその戦いの過程に限定される。英米の商船・商人とロシアアメリカ会社との競合状況や前者と「Tlingits との関係」といったロシア側史料が注目する点は言及されず、この事件の広範な背景や原因をこれから考察することは困難である<sup>13)</sup>。

しかし双方の研究者ともに「Tlingit oral traditions」を除く基礎的史料の選択では以下の三種で一致している。<sup>①</sup> K. T. Хребников のこの事件に関する報告書（一八三二年、Ново-Архангельск—再建された Sitka 定住地—にて執筆）。これは元来、総支配人夫人に献呈する目的で書かれた。彼は一八〇一年にロシア—アメリカ会社に入り一八一三年六月までカムチャッカ、続いてイルクーツクで勤務した。一八一五年に L. K. A. v. Hagemeister 指揮下「the Kutuzov」号でクロンシュタットから出発し、一八一七年十一月二〇日に Sitka 着。翌一八一八年一月 Hagemeister が A. A. Baranov と交代し最初の海軍軍人のロシア領アメリカ総支配人になると、その補佐として一八三二年まで当地で勤務。前総支配人にして建設者 A. A. Baranov、彼の副官 И. А. Куков によって Old Sitka 建設の参加者でその壊滅の詳細を知る者やこの事件の生存者と直接話して、証言を集めることができた。彼の報告書が一次史料と見なされる根拠はここにある。<sup>②</sup> 一八〇二年七月一日付 И. А. Куков の Kodiak 島の A. A. Baranov への報告（Yakutat で執筆）。即ち「プロムィシユレンヌイの人々と現地諸部

族 (местными племенами) との武力衝突及びノヴォアルハンゲリスク (Новоархангельск) のインディアンによる壊滅に関する報告」。Куков は A. A. Baranov がアラスカ赴任にあたり「Г. Шелиховとの契約で自らの副官とし選り雇った人物で、前者が一八一八年にロシア領アメリカの総支配人を退任するまでその最も信頼された副官として現地でその事業の実行に挺身した。ロシア—アメリカ会社とその前身のシェーリホフ会社の中核事業であるロシア人プロムィシユレンニキと多数の現地民（主に Aleut）狩猟者（наровицки）から成るバイダールカ船団派遣による毛皮猟では「Kodiak 島から派遣される「Дальная партия（遠距離狩猟団）」を長として度々率いて Yakutat から Sitka 方面に遠征した。一八〇二年、彼の партия も Tlingits の攻撃を受け交戦した。その後 Михайловская крепость 陥落の情報を得るやバイダールカを派遣し壊滅直後の要塞の情報を収集した。従って彼の報告は、この事件に関する直後の直接的史料である。Tlingit 側の研究者も「Russian Aleutis (Aleut) Alutit (Kodiak エスキモー、Konjagi) と Tlingits 間の現地の関係」を示す「高い価値を有する直接の報告」と当時のロシア人—現地人関係解明のための一次史料としても評価している。<sup>③</sup> 一八〇二年の事件の生存者の証言と Tlingits の伝承。前者は多く残されてはいない。本稿では A. Плотников (ロシア人) と K. Пиннион (Konjagi、Kodiak 島 Чинiak 村の出身。ロシア人 Захар Лебедев の妻) の証言を取りあげる。両者とも Old Sitka に対する Tlingits の攻撃時に、現場や現場の近接地にいた。また、この時の Tlingit 側の攻撃に関する具体的事実については「Tlingit oral traditions」も重要な一次史料である。

①②③の史料でも部分的に言及されるが、来航していた外国船商人の、事件に関係する行動等については「イギリス船「The Unicorn」号船長 Henry Barber 関連のオーストリアの新聞史料と W. W. Schumacher の研究が重要であり、本稿もこれを用いる。<sup>14)</sup> 及び「本稿は①と②を中心に③及び H. Barber 関連史料により①を

補足・修正。さらに、Tlingit oral traditions 研究の成果を参照しつつ、一八〇二年の諸事件の原因と概容及び形成途上のロシア領アラスカへの影響を考察する。但し、事件のプロセスは概略の記述とする。それは Tlingit oral traditions とロシアの残存史料に示された戦いの諸事実、行為そして余波は概ねすべての主要な点で一致する。それを Tlingit の研究者も認めており、従ってこれまで多くの研究書で言及されるプロセスを大幅に修正する必要は認められない。

さて「一八〇二年の蜂起」と呼ぶ場合は Tlingits のロシア人とその狩猟団 (партия) を構成する Chugach、Koniagi、Aleut 等の北部太平洋岸諸民族に対する攻撃の総体を指す。それは以下の三事件から成る。(一) Михайловская крепость (Old Sitka) の全面的破壊。

(二) の後まもなく発生した И.Урбанов 率いる狩猟団 (сигкинская партия) への攻撃とその壊滅。(三) Куцов 率いる狩猟団への攻撃と撃退。これらは(一)と(二)が六月で、(三)は五月である。時間的には(三)が最も早い、(一)が拠点の定住地の完全破壊であり、規模においても重要性においても最大であることに疑いない。(一)は(二)に随伴する事件の性格を有するものである。(三)は(一)とは発生地域も離れ異なる性格の事件と考えることができる。もちろんこの(一)(二)(三)が一つの計画により実行されたとする意見もあるが、それにはまだ確実な証拠が不足していると思われる。そこで本稿は(一)と(二)をまず検討し、最後に(三)を検討する。最後の(三)の当事者 Куцов の報告には(一)の事件後の Sitka から Yakutat の広い地域の状況と彼の得た直接情報が含まれるので、ここでこの事件に対する直接的なロシア側の評価と対応を考察したい。

### 1. The Tlingits of Михайловская крепость (Новоархангельская крепость) 攻撃とその壊滅

一八〇二年春、В.Г.Медведников の指揮下この要塞には、ロシア人二九名、ボストン船「Hancock」号から降ろされたアメリカ人五名<sup>20)</sup>、及び Aleut 約二〇〇名と何十人かの Koniagi の女 (Alutiq)

とその子供達がいた。この女達はロシア人や Aleut の妻だった。Медведников は、同年五月に И.Урбанов 指揮下の九十漕のバイダールカ (狩猟団、сигкинская партия) をフック岬に Кевовской залив (現 Frederick Sound) に派遣した。これは Aleut の他に、ロシア人 А.Карпов と А.Кочевов 及びアメリカ人一名から成る。次に六月十日トド・アザラシ猟に В.Кочевов 指揮下 Aleut 八名、ロシア人五名、アメリカ人三名から成る小狩猟団が発発した。要塞に防衛のため残ったのはロシア人二一名、アメリカ人一名、病気の Aleut 二〇名として女と子供約五〇名。Хребников によればこの中に Колошенки (Tlingit の女) も含まれていた。その上後述するように攻撃時にはロシア人全員が要塞内にいたわけではない。十六人の戦闘能力のあるロシア人 Промысловников と一人のアメリカ人だけが司令官を除く要塞防衛者だった<sup>21)</sup>。

司令官 Медведников は当地の Tlingits の友好的気分を強く確信していた。去年 Aleuts により殺害された彼らの clan の人々の復讐として彼らが秘密の殺人計画を持っているとうわさがあったが。しかし要塞の防壁の中、自身は充分安全と見なし、Kodiak から来る狩猟団に対し殺害をはかる企てはあり得ると彼は考えていた。他方、要塞で暮らしている Колошенки が Tlingit 側に「人員数も要塞内の全活動、警戒、そして不注意も知らせていた。Колошпи は攻撃の日の日曜日を選んだ<sup>22)</sup>」攻撃日については史料により多様であった。Хребников は六月十八日又は十九日の日曜日としたが日付と曜日が不一致である。生存者 А.Плютников は「日付は全く覚えていない。それが日曜日だったこと以外は」と証言した。しかし六月十五日と二二日は日曜日であるが、И.Куцов が Sitka 方面に派遣した六漕のバイダールカの狩猟団員が、既に焼亡してしまったこの要塞を見たのが六月十九日である。従って二二日の可能性は無く、六月十五日を攻撃日に比定することに今日研究者間ではほぼ一致を見ている<sup>23)</sup>。

「Old Sitka」でのこの戦いは Tlingit の一般的表現では「the

「Pingsits がロシア人に対してこん棒を取った時」であり、場所は「Gajaa Heen にある未完成の要塞」である。当日 Melvednikov には危機到来の懸念は薄く、朝早くロシア人 П. Кузнецов と П. Изютин を魚獲りにバイダールカで行かせ、アザラシ狩りに Параданов も送った。のみならず昼食の後 E. Рыбагов が小川のせき止めの見回りに出かけた。最後に二時頃 A. Плотников が雄牛を点検するため小川の方に行った。この直後 Pingsits の攻撃が始まったことは彼の次のような証言が示す。「短時間で要塞に戻つてくると銃と槍で武装した大量の Pingsits の群が既に兵舎 (казарма) を包囲していた」と。また Хлебников によれば「彼ら (Pingsits) は突然、多数で、しかし静かに騒音をたてずに、見通しのきかぬ密生した森林の中から、小銃と槍と短刀で武装して進撃して来た。」そして Плотников は、バラノフの知人だった「Sitka taion」Mихаило (Окаутлетт = Шк'аулуей) ロシア人が名づけた名) が攻撃の間指揮を取る姿を目撃した。「Mихаило (Шк'аулуей) は支配人の家の向い側の丘の上に立ち、兵舎を包囲した人々を指図し、バイダール (бары) に早く来るように叫んでいた。それらは多分遠くに離れていたわけではなかった。彼の呼び声に応じて (一瞬のうちに) 六二漕のバイダールが岬の後側から現われた。以上のように Pingsits の [Gajaa Heen の未完成要塞] (Mихайловская крепость) への攻撃が非常に多くの人間により、海上 (戦闘用力ヌード) と森を通じて実行されたことは、Pingsits oral traditions の記録とも一致する。それはロシア側に恐怖を呼びおこすに充分であった。「彼ら (Pingsits) の顔には、野獣の天性に従って赤やその他の色の斑点があった。もじやもじやの髪は羽毛が詰められ鷲の羽毛がちりばめられていた。何人かは歯をむき出している肉食獣やその他の空想上の怪物じみた動物の姿を描く仮面をつけていた」武装と恐ろしい叫び声とともに。

突然の攻撃と要塞内の建物の包囲行動は要塞内の人々にまず建物内特に中心の兵舎への避難とその閉鎖を促した。Плотников は急いで

兵舎に向って走ったが、既にロックされ中に入れなかった。そこで銃が保管されている家畜小屋に走って入り、家畜を世話する女に小さな息子とともに森に隠れるように言い、自分はこの小屋に閉じこもった。しかしまもなく Pingsits がこの小屋にも走ってきて戸を壊して入り、彼のジャケットと小銃をつかんで捕まえようとした。彼はそれらを手離して窓から脱出し、背後の森に走りこんで隠れた。二人の Pingsits の追跡者は彼を森で見失う。他方、Koniagi の女 Катерина Пиннуин は三回、ロシア人が何か叫んでいるのを聞いた。まもなく台所小屋の後からロシア人 Г. Тюмакаев が来て言った「兵舎に入ろう。The Pingsits が小銃で武装してやって来る。何か異常な事が起つてゐる」と。彼が言ったので、建物外にいたロシア人と女達と子供は兵舎に入り錠し閉じこもった。彼女達は窓から銃と槍で武装した極めて多数の Pingsits を見たが、すぐに彼らはこの兵舎を取り囲んでしまった。この要塞の中心的建物は二階建てで二つ бунк (小要塞) とバルコニーがついていた。その下には穴蔵があり、上階の入口は外(道)から入れた。下階の戸のすぐ近くにカノン砲が置かれていた。Pingsits の攻撃が開始された時二名のロシア人 С. Мартынов と Глохтин は兵舎に逃げこめず外にいて最初に殺害された。従つてこの時兵舎防衛者はロシア人が二階に Melvednikov と五人、一階に八人、そしてアメリカ人一人の計十四人。Pingsits は兵舎を取り囲むや窓を小銃で銃撃してよろい戸を破壊し止むことなく窓から銃撃を行い続けた。さらに彼らはまもなく兵舎の入口の間 (бень) への戸を破り、兵舎の戸に小さい穴を開け、これらの穴を通して、激しい銃撃を開始し絶え間なく続けた。他方 Melvednikov は何とか下階に降り、十二人を組織して「突然の狂暴な攻撃に」小銃で反撃した。しかし防衛側はあまりに少数であり、前述の敵の最初の銃撃で И. Малапкин は殺害され負傷者も出ていた。結局兵舎への最後の戸扉は破壊され、敵 «Колоши (Pingsits)» は群を成して流れこんでこようとした。その瞬間既に負傷していた Гумакеев がカノン砲を発射し、そ

の砲に向い合っていた者はその場に倒れ、他の者は後ずさりしおぼけづいた。カノン砲発射はさらに何回か休みなく行われた。現場にいた Pinnyun の証言によれば「何人かの Tlingits がその時殺されたようでした。the Tlingits はその戸から少し離れ、他方 Shanin (Shanin) と残りのロシア人は防衛のため戦っていた」ところが、下階にはカノン砲の砲弾が充分ではなかったので Shanin (Shanin) が上階への天井に穴をあけた。しかし巨大な炎がその穴から吹き出した。出火の原因は不明だが上階から出火し火勢が拡大した後、天井の穴を通して下階に火事が広がったと考えられる。この炎が下階で激しくなった時、身を守るため女性と子供のすべては急いで兵舎の下の穴蔵に入り隠れた。ところがロシア人が兵舎から新たにカノン砲を発射した時に、この穴蔵の外の通りへの戸が吹っこんでしまった。そのため彼らは穴蔵から要塞の外庭に出ざる得ず、そこで Tlingits に捕えられた。そして彼らは捕えた女性と子供を自分達の間で分配し、近くに留められていた自分のカヌーに引きずっていった。このバイダラから Pinnyun は炎が激しくなり、兵舎で防衛していたロシア人が煙と炎の暑さに耐えきれずバルコニーから地上に飛び降り、Tlingits が彼らを槍で突き刺し上げるのを見た。他方、前記の Plotnikov も森から出て兵舎に近づこうとしてこの要塞陥落の現場を目撃した。それは新造された船も含め全ての建造物が燃上する姿だった。「一言で言えば建造物すべてが巨大な炎につつまれ燃えていた。そして煙と炎の中、ラッコの毛皮やその他の毛皮、会社の所有する商品・物品、司令官 Медведников 及びその他の狩猟者の私有する物品が上階にいた野蛮人 (Tlingits) によりバルコニーから海側の地上に投げ出され、他の者がそれらを拾いあげ要塞近くの海に停留していたバイダラまで運び積みこんでいた」のを目撃する。Pinnyun の証言でも、女と同様に会社の所有物とラッコの毛皮が Tlingits の間で分配されていた。Plotnikov はこの目撃直後再び森に逃げこみ巨大な木の根の間に隠れるが、そこからバルコニーから飛び降り森に逃げこもうとした

が、追いついた Tlingit 四人に槍で刺し上げられて兵舎の近くに運ばれそこで首を切り落とされた Медведников の副官 П. Павский の最期や、兵舎の下階から飛び出した Кабанов を彼らが槍で殺すのを目撃した。彼によれば「野蛮人の手によるこの恐るべき流血と激しい火事はその日の夕方まで続いた」その後彼は灰以外何も残らぬ所に近寄り、そこで槍を刺された牛の死体に遭遇し、同情して槍を抜きそれを埋葬しようとするが、再び Tlingits が近づいて来たので森に身を隠すことになる。

Tlingits の側で攻撃に参加した者の総数は不確実である。Хлебников は千人以上と推定し、Гринев の計算では千五百人である。総指揮を取っていたのが Kiks'adi clan のリーダー Скаутрегг (Shk'awulyei) であることは前記の Plotnikov の目撃情報から明らかである。だが要塞攻撃の際に現場で指揮をしたのは彼の甥であり有名な Tlingit の軍事指揮者だった Коревн (Kalyaan) である。Хлебников によれば、彼が攻撃での第二の(重要な)人物で、若く、大胆であり、Баранов とロシア人への個人的増悪を表わし、どこでも他人の手本となるように先頭を切って突進した。この攻撃時に最初の死者である步哨(見張り)を殺害したのは彼である。Tlingit oral traditions は語る。但しこれを鍛冶工と特定し、Kalyaan が死者のハンマーを武器トロフィーとして奪い、お気に入りの戦いの武器としたことにこの伝承の重点はあり、最初のロシア側の死者についてロシア側の記録とは異なる。また兵舎(中心の、ロシア側の残存者のほぼすべてがたてこもる)に最初に突入したのは二人の若者 Stoonok (父は Kaagwaantaan clan) と Duk'aan (父は Shookaneidi clan) であり、Kiks'adi clan に属する。彼らは Медведников と Гумяков が小カノン砲を発射した時死亡した最初の人間でもあった。次に前記の兵舎を火事にした実行犯であるが Tlingit oral traditions で実名は無いが二名の老人の行為として語られている。また Tlingit oral traditions の研究者は、要塞内に居住している Tlingit の女達により火事が最初発

生させられたとの説を「われわれの史料では確認するものを何も見いだせない」と否定し、要塞内にいたアメリカ人一人が火事の発生に関して Tlingit を助けたとの説にも同様の理由で不定的である。火事発生時兵舎内にいた K. Пинчунин の目撃証言にもこれを伺わせるものは無く、彼女の目にした兵舎内の状況もその可能性を疑わせる。従って両説の否定は妥当であろう。即ち、火事は上階から発生し燃え広がったことのみが確実に言い得る。そして火事の中、ラッコの毛皮をはじめとする兵舎内に保管された商品や公的・私的所有物品が Tlingits により組織的に運び出され、彼らのバイダラに積みこまれたことは、彼らもロシア側の報告に同意している。以上のように、Tlingit 側の兵舎攻撃の現場指揮者が、Shkawlyeul ではなく Kalvaan であることを除くとこの攻撃のプロセスについてロシア側と Tlingit 側の見解は大概一致している。

Tlingits によるこの要塞への攻撃・破壊は要塞自体の焼亡で終わったのでは無い。攻撃日に要塞外にいた会社の雇員や少数の逃亡者への攻撃・追跡がその後も続く。

まずアザラシ猟に派遣された B. Кочевов 指揮の小バイダールカ部隊である。この隊が翌日そこから戻り要塞に近づくとその場所に異常な炎と煙が見えた。彼らは観察のため止まっていると森の中に合図で彼らを呼んでいる人間を認めた。これを Aleut と見抜き、急いで海岸に近づき彼をバイダールカに拾いあげた。しかし不幸な事件について彼がやつと脈絡のない話を少し語ったその時に、多くのカヌーが彼らの方に一直線に向って来るのに気づいた。Baryunin は外海に出ようと何回か試みた後、Tlingits の手から逃れるのは不可能と見てまっすぐ海岸の絶壁の方をめざすことを決断。彼らがそこに接岸するやいなや Tlingits のカヌーが取り囲み、Tlingits は彼らに対して小銃を絶えまなく発射し続ける。しかし Baryunin と五人の Aleut (Konniagi か) が海岸に走りのぼり、絶壁の頂上にかろうじて登ることができた。その他の人々は登るのに失敗し、絶壁の下であえて応射し抵抗す

るが、敵から雨霰と銃撃され、まもなく二名を除く全員が殺害された。この二名 B. Кочевов と A. Брылевский は重傷を負い、Tlingits の捕虜となるが、彼らの所に連れて行かれ、長時間苦しめられ虐殺された。他方、生き残った Baryunin と五人の Aleut は森に隠れ、七日間食物無しにさまよった。その間に四人の Aleut が食物を捜しに行き音信不通になった。彼と Aleut 一人は海岸に近づき二隻の船を見る。幸運にもその船が送ってきたボートで船に収容された。また、前述の目撃者 Плогников も三度目の森への退避を行った後、要塞から遠くない所で一晩過してから、朝銃声を聞きその方向に行くが誰もいなかった。彼によれば、もはや身を守るには森に入りこみ山に登るより他は無いと考え、その場を去った。しばらくして彼と同じ境遇にあった二人に偶然出会った。一人は Chiniak 村 (Settlement) 出身の若い女で胸に小さな子供を抱いていた。また一人は Kiliada 村出身の男で、Kadiak (Kodiak) партия が出発の時病気のため残されていた。Плогников は二人を仲間として受け入れ、山に登った。彼らは森の中を食物無しに水だけで八日間さまよった。八日目、正午頃二発のカノン砲発射音を聞き、彼が二人にその場で待つように言って、森を通りぬけ、入江に出て海岸の近くに隠れ、しばらくしてから海岸に近づいて行った。その時一隻の船が小島の後から現れ、湾の中に停泊した。イギリス船である。会社の総支配人 Баранов がかつてテントを張った岩 (Kekur) の上に登り彼はその船に大声で叫んで助けを求めた。しかしその入江にいた Tlingits が彼の声を聞き、六人の男が彼に襲いかかってきたので、森に隠れ、やつと逃れた。再三の攻撃を受け、彼は別の場所(岬の干潟)に移らざる得ずそこで再び前記の船に呼びかけ助けを求めた。すると一漕の武装した小帆船がその場に來た。Tlingits が彼の方に來たが彼はかろうじてそれに乗りこむことができた。前記の船の船長 (Barber) 自身が小帆船に乗っており、船上に到着するやいなや彼はこの不幸な事件についてすべてを説明し、さらに海岸に残してきた若い女とその息子及び男を救ってくれるよう

頼み、船長に彼が彼らを隠した場所を示した。船長は直ちに小帆船を出すよう命じ、それがその隠れ場所にまっすぐ行き、若い女達を乗せ船にまで運んで来た。その後すぐに同じ小帆船がその湾の別な側に派遣され、「驚いたことにロシア人 Баргун を運んできた。」<sup>⑧</sup>前述の В.Кочев 隊のロシア人生存者 Баргун と Плотников は共にイギリス人船長 G.Barber に救出され「The Unicorn」号上でこうして再会した。二人は翌日に船長に Новорхангельская крепость (Old Sitka) が建っていた場所に行かせてくれるよう頼んだ。船長は了承し、小帆船に乗りこみ彼らを伴って行った。灰燼に帰っていたその場所に着するや見つけたのは仲間の傷つけられた遺体で Кабанов 以外は首が無かった。それから彼らはその遺骸に涙を流し埋葬した。見つけた財産は溶けた真鍮製のカノン砲の鑄塊と破壊されたカノン砲一台のみだった。

その二日後六月二四日 Михайловская крепость 攻撃の指揮を取った Тойон Скаутгер (Shkawulyei) と彼の甥で現場指揮官だった Коглеян (Kalyan) が二漕のバイダラでこの船に来た。彼らはロシア人の乗船に警戒していた。しかし船長は二人を隠し、ロシア人の存在を言わず、彼らに同行した Tlingit の少女が船に乗るや、Плотников 等の要請に答えて彼らを逮捕し、тоion Скаутгерとその甥を手かせ・足かせで拘束した。そして Barber は解放の条件として彼らが前述の要塞陥落に際して奪った捕虜とラッコ皮すべての返還を要求した。The Тоion は彼のバイダラに残っていた従者に命じて、捕虜・捕えられた女そしてラッコ皮を船に運ばせた。が「直ちにすべてではなく」一人ずつだったため、Barber は、結局捕虜全員を引き渡さぬ場合は処刑又は Kodiak に連行すると Тоion を脅迫した。そうする間に二隻のボストンからのアメリカ船が六月二七日(七月九日)に湾 (Starrigavan) に入り、相互に近く投錨。「the Globe」号(船長 Wm.Cunningham) と「the Alert」号(船長 John Ebbs) である。後者はかつて「わが Novo-Arhangelskaia fort」を来訪したこと

があり、Баранов や多くのロシア人と知己だった。この二隻の船に多数のバイダラで Tlingits が来たが、二人の船長にこの悲劇的狀況について Barber は知らせ、三人で話し合いロシア人捕虜救出のため一緒に行動することを約束した。そして前述のバイダールカが船を取り巻くや、彼らはカノン砲をぶどう弾を使用して発射した。彼らのバイダラはそれにより沈められたり、追い散らされた。また三船から出たボートが Tlingits のバイダールカを攻撃し多数を殺害した。また何人かの Tlingits を Ebbs は船上で捕虜とし、それと交換に捕虜にされた女が救出された。Плотников 達はこの女から要塞攻撃の直前に外に出た Тарапанов が Tlingit の捕虜であることを知り、Ebbs と Barber に急いで彼の救出を頼んだ。結局 Тарапанов は七日(十九日)三船が Sitka Sound に移動後に十人の女、子供二人そして多くのラッコの毛皮とともに返還された。その後 Barber は救出された会社社員と女、子供を他の二船から自身の船に集め、Плотников や Баргун と共に Kodiak へと運ぶこととなる。彼に委ねられた捕虜はロシア人三人、Aleut 二人そして十六人の女と子供である。また Хлебников によれば要塞の倉庫に保管されていて、Tlingits に略奪されたラッコの毛皮は二七〇〇頭と計算され、おそらくその大部分を Barber は自分のものとした。彼は七月十日(二二日)に Sitka Sound を出て Kodiak に向い。

Плотников の目撃証言は以上であるが、その中には誤解と思われる点も存在する。彼は前述の Kiks'adi clan のリーダー (Тоен) Shkawulyei (ロシア名 Михайло) とその甥 Kalyan を最終的に Barber が解放したと信じていたが事実は異なる。彼の証言では Barber の船上での拘束以後の両者に関して記述が消える。おそらくそれに基き Хлебников も「тоенへの恐怖を増すための輪索をヤードの桁端に結びつけた」ことで記述を終えている。しかし後述のようにインディアンの処刑(おそらく前者)は今日確認されている。Плотников の誤解は、二人の拘束された Tlingits の指導者が別の船

に移され彼の眼前から姿を消したことによると推測できる。恐らく彼はそれを両者の解放と考えたのであろう。Barberからの説明があったとしても、船上のロシア人三人には言語上の障害故にこの件の正確な理解は困難だったと考えるべきである。

拘束されたTingitsの運命を含む諸史料は、前述の三隻の船が一八〇三年の春に到着したオーストラリアのSydneyでW.W.Schumacherにより発見された。これは一九七九年に「the Alaska Journal」上の彼の論文<sup>(80)</sup>で公表された。本稿はこれらの史料の中でこの問題に関する部分に言及したい。史料は「Sydney Gazette」の記事二点と広告である。第一は一八〇三年五月二十九日(西暦)付の新聞の記事と資料である。Cunningham (「the Globe」号船長)この記事ではM.Gee's船の船長)によりCapt.Simsonに知らされた情報として、Norfolk Soundのthe Russian factoryが現地民により攻撃・破壊された事件を伝える。次に、記事はCapt.Barberが「前記の船と協力して」三人のthe chiefsを捕え、(事件の)捕虜が放棄されるまでその解放を彼が拒み、さらにこれが拒否されたため彼らの一人を絞首刑に処すことを命じた」と記される。そして最後はこの処刑の効果が全捕虜がCapt.Barberに返還されることで終わる。これは捕虜獲得のためBarberが私的に処刑を行ったと疑われかねぬ内容である。これに対して、一八〇四年十一月十八日付同紙に「the Unicorn」号のCaptain Henry Barberよりこの記事が載る。これはBarberの航海日誌の抜粋であり、期間は大概六月二十八日(六月十六日)Norfolk (Sitka) Sound 到着から七月二二日(七月十日)Norfolk (Sitka) Sound 出発までである。内容は前述のロシア人の居留地 Михайловская крепость 壊滅の翌日にそれが存在していたStarrigavan 湾に入り、事件後の状況を直接目にし、最初は単独で、ホストンからの二船来航後はその船長と協力して当地のTingitsの動きに対応・対抗する記録である。事件で逃亡者や捕虜になったロシア人アメリカ会社の雇員(ロシア人・Aleut・Koniagi)や要塞内に居

住する女と子供の救出や奪われたラッコの毛皮の奪回(ロシア側に未返還)のプロセスが時系列で書かれる。事件後は一ヶ月間のSitka地域での外国人―Tingit関係や外国船相互の関係を知る貴重な史料である。ロシア側の目撃証言の欠ける部分を補い、新しい知見を与えている。例えば六月十八日(三十日)に「the Chief of the sound」(Sitkaのtoen)が三人のアメリカ人船員を同行して「the Unicorn」号を訪問したことである。これはПлотников等ロシア人がこの船に救われる以前の事であり、当然目撃証言では言及されない。しかも同行したアメリカ人船員がこの時BarberにTingitによるロシア要塞攻撃・破壊を最初に伝えたことが記されている。アメリカ人は「the Russian Factoryの破壊とthe Governorの虐殺、the Factoryにその時居住していた三十人以上と共に…the Chief of Sheatk (Sitka)と彼の部族による」との悲しい話を彼に知らせた。Barberによれば彼らは、ホストン船「the Jenny」号を放棄した船員であった。カヌーで去ったThChiefが彼らを船に残したため多くのことを彼に話し、ThChiefの下での彼らの状況も含め当地の情報をBarberは得た。彼はさらに六月二〇日(七月二日)移動先の「Snug harbor」からアメリカ人一人を同行し、武装し戦闘員を乗せた小帆船で六マイル離れた旧Russian factoryが建っていたStarrigavan Bayに行き、完全に灰燼に帰した廃墟とその間に散在している約二十人の男のずたずたに切られた肉体を目にし、その光景にショックを受ける。Barberは以上のように、Плотников等の救出や六月二四日(七月六日)の前記の要塞攻撃を指導した二人のTingitリーダーの「the Unicorn」号来訪と彼らの逮捕以前に、この事件と当地のその後の状況を充分知っていた。

さて、前述の要塞壊滅の三日後のTingit chief (Toen) のBarber船来訪はロシアの史料では言及されていない。しかしПлотниковによれば二人はこの船を来訪し、拘束された。そこでほとんどの研究で二回目のTingits指導者の来訪が初回の来訪であるかのように書



かれてきた。また Barber が両者を拘束した理由がロシア人生存者の願以外には不確かなままであった。しかし前述の航海日誌の記述に基くなら、事件での Tlingits の行為を既に知っていた Barber にとって彼らの逮捕は正当な理由のある行為だった。この「The Chief とその従者の一人」即ち Kiks'adi clan の指導者 Shkawuyell とその甥 Kalyān が七月六日(六月二十四日)に「the Unicorn」号を四遭のカヌーで訪れ乗船し、そこで逮捕。拘束された経緯(三人の Tlingits と記す)を述べ、その理由をロシア人囚人(Tlingits の捕虜)救出のための人質の確保とする。その証拠のように、「この航海日誌抜粋の後半は、女性を中心とする人質の回収及びそれに関係する Tlingits への対応が記述の中心である。それを除くと七月九日(六月二十七日)「Globe」号と「Alert」号来航後は両船船長と協力して Tlingits への攻撃を含め捕虜救出活動を実施したことに關して量的に多く記述する。そしてこの抜粋の最後は他の二船から救出した捕虜を受け取り、七月二十二日(十日)に Norfolk Sound を出て Kodiak へ十二日間の航海を行い、そこで船上の救出された人々を無事 A. Baranoff (原文)に届けて終わる。それは以下のような重々しい文である。Kodiak で「私は幸いにも Alexander Baranoff 様、アメリカの北西岸地方の隣接地域における全ロシア人居留地の the governor and di or tor にこの人々全部を健康良好な状態でお送りさせていただきました。」<sup>54)</sup>この抜粋の内容は「Sydney Gazette」の第一の記事での Barber に対する非難への反論を意味する。まず、現地民による流血の残酷なロシア人居留地攻撃・破壊事件の直後この事件で捕虜となった男・女・子供の救出を Barber が人道的に行なったこと。次に遅れて来航アメリカ船二隻の艦長との共同行動であり彼の独断による行動では無いこと。最後に Kodiak に連れて行った救出された人々は全ロシア人居留地の総支配人 Baranov に届けたこと。但し彼が実際は、Baranov から被救出者の代金として一万ルーブリ相当の毛皮を獲得したこと。つまりこれが交易だったことには少しも触れないが。

とは言え、この抜粋も彼への非難に完全に答えるものとはならなかった。これは第一の記事の中核である捕えられた三人の the Chiefs の中の一人の処刑の件が不自然に抜けていることに因る。確かに彼らの逮捕は記されるが処刑日である七月十一日(六月二十九日)には「誰も現われなかった」と書かれるのみで、その後も逮捕された三人に關する記述は無い。恐らくこの点での非難に答えて問題の決着を図ったのが第三の史料一八〇四年十二月九日付告知(Advertisement)である。<sup>55)</sup>即ち一八〇三年五月二十九日「the Sydney Gazette」に掲載された「the Russian Factory on Norfolk Sound の natives による攻撃と虐殺事件の報告記事の中に記された the chiefs の逮捕・処刑の件に対する答えがこの目的である。即ち、この記事の上記の部分のみが引用文の形で載せられ、返答対象の問題の所在が明示されるからである。そして Capt. Barber は「上記の手段を単独で採ったこの推測」から自身を解放する機会を捕えるのは義務と考え、故に「以下にその名前が署名されている何人かの Gentlemen により満場一致で行われた決議の a verbatim copy (原本は今回彼が保有している)を公表すると告知の理由と内容を示す。」この告知文は、一八〇二年七月十一日 Norfolk Sound において「the Globe」号(William Cunningham 司令官)上で開かれた軍事会議(a Council of War)の議事録(proceedings)である。また W. Cunningham、John Ebnetts、Henry Barber (前記三船の艦長)他七名、計十名の出席者名。次に決定された事項の記載。「the Russian Factory の Shetka (Sitka) のインディアンによる最近の憂うつな大虐殺はその結果において最も非道で重大である。」とこの事件の悲惨さを認める。特に略奪物の価値、野蛮人の非人間的行為によって苦しめられた人々の数(その中に無抵抗の女と子供も)、両性の多数の捕虜が問題とされる。次はその捕虜の悲惨な状況とその解放が七日間(おそらく逮捕日と当日七月十二日)不成功との判決の背景説明である。そして続いて本題に入る。判決の対象は逮捕された仲間の一人「a principal ringleader (第一の親玉)」

である。彼が「the Alert」号の船員二名に対し機会を捉えて理屈に合わぬ危険な傷を負わせたことが、この会議の審議対象となった。以下の通り判決は処刑だった。「公的見せしめはこのインディアン達の残酷な行為への将来の抑制として働くのみならず、…即ちロシア人捕虜の解放をより効果的に成し遂げるであろうと思ひ決定した(大文字)」。そして満場一致で彼に死刑の判決を下し、その即時執行を命じた<sup>85)</sup>。そしてこれに従い「the Globe」号甲板上で夕方、the Chief of Sheika と他の現地民 (natives) の面前で判決が執行されたことが記され、十人の軍事会議出席者(判事、三船の船長と上級乗組員)のサインで正文は終わる。そして添付された写しの the Judge Advocate's Office での登録を記す。

以上のように前記の逮捕された Tlingit 指導者は、主にロシア人捕虜救出のための公的みせしめとして処刑された。しかしその名は不明で「a principal ringleader」とのみ呼ばれている。Kalyaan は次の一八〇四年の戦いの参加が Tlingit oral traditions から明らかである。また彼が Shkawlyeii の後任になったことをロシアの報告も言及している<sup>86)</sup>。従って彼は生存者である。Tlingit oral traditions の研究者の間でも、逮捕された Tlingit 指導者の中で Shkawlyeii が処刑されたと考える方向にある。理由の第一は彼はロシアと Tlingit 双方の報告でくり返しそれまで言及された唯一の有力な Tlingit の人物であるが一八〇二年以降突然記録から姿を消すこと。第二は Tlingit の伝統では、死んだ母方の伯父の跡をその甥が継ぐからである。しかしこの事件は「われわれがよく知っているいかなる Tlingit oral tradition にも記録されていない」との理由で Tlingit 側の研究者もここまで探索を止めている。

Barber は露暦七月二四日、Kodiak 島に到着した。その知らせを聞き Afognak 島から戻った Baranov に対し、船上の元捕虜ロシア人三人、Aleut 二名そして Konagi (今日 Alutit) の女と子供十八人の買い請け金として五万ルーブリ又は二万ピアストル(現金又は彼が定

めた価格による毛皮商品で)を彼は要求した。Baranov はこの身請け金総額の支払いを拒み、脅迫にも動せず決然として価格交渉に臨んだ。交渉は買い請け金として一万ルーブリ相当の毛皮商品を渡すことで合意に達した。Barber はこの商品が届けられると船上の元捕虜達を解放した<sup>87)</sup>。そして W. Schumacher の彼の小伝によると一八〇二年の航海シーズンが終ると、中国へと去った。途中で Honolulu に十二月十七日に到着し、彼は理由は不明だがそこで「the Unicorn」号を降りた。その後の Barber の行動は割愛するが、前記の告知との関連で一八〇四年十月十八日、二八〇トンの「the Myrtle」号の船長として二〇〇〇ガロンのラム酒を積み Sydney に到着した。その後の彼の運命は省略するが、一八〇七年五月にこの船で Kodiak 島の Pavlovsk に現われたことのみ記す。当地で彼は船と積荷を Baranov に売却し、その後会社の船で船長として一時働いていた。

### III' Урабанов 隊の壊滅及び Куков 隊の Sitka 行 (И. Куков の報告)

Old Sitka の事件発生と近い時期に Tlingits の攻撃は他の場所でも行われる。九〇漕のバイタルカから成る И. Урабанов 指揮下の狩猟団 (сигхинская партия) が隣接地域で Tlingits の攻撃により壊滅した。Хлебников の叙述によればこれは Tlingits の妨害に会わず Бобровая бухта<sup>88)</sup>に着き既に千三百頭のラッコを猟っていた。帰途それは Кековской пролив (現 Keku street) に六月二〇日、夜泊のため留まった。狩猟団の長達は当時、何の不愉快事も無く、Tlingits と Aleuts の間の悶着の原因も見とめず、故に余計な心配せずにごくこの夜も夜営した。しかし Tlingits (Korolshi) は準備を整えて既にこの狩猟団を追跡し、その動きを見張りながら、(攻撃に)最適の場所と骨の折れる移動により疲れきった Aleuts が非常に油断するのを待っていた。Aleuts が寝こむやいなや Tlingits は群を成してしかし音もたてず密生した森から出て来て、夜の闇にまぎれて至近距離に近

づき、すばやく敵の陣営を偵察し、それから叫び声をあげて眠っている人々に襲いかかった。六月二一日である。後者は防衛を考える時間も無く、槍や短刀でほとんど一撃で殺害された。走って逃げ攻撃を避け森へ隠れたのはほんのわずかだった。残りの全ての人々が休息場所で犠牲となった。殺人を行った後 Tlingits は狩猟団のバイダール力からすべてのラッコ皮を運び出し、Aleuts の全所有物を集め、それらを彼らのカヌーに移した。それは叫び声に応じて近隣からそこに来ていた。その後、全バイダール力を切りきざみ破壊した。Tlingits は抵抗を受けず、一人も命を失わず、多くの獲得物で豊かになり、喜びの声をあげながら村々に散っていった。ロシア側では、死者は Aleut 一六五人とロシア人二人、生存者は狩猟団の長 И.Урбанов と Aleut 二人だけであった。<sup>⑧</sup>

唯一のロシア人生存者 И.Урбанов の運命は以下の通りである。<sup>⑨</sup> 彼は捕まり監視下に置かれるが、同様に捕えられた Aleut の助けで脱出に成功し、森にかけ込み隠れた。森で七人の Aleuts と集合し、翌日の夜慎重に敗北の場所に近づき、他のものより破損の程度が軽い二漕のバイダール力を発見し、急いでそれを修理し Sitka へ出発した。夜は漕ぎ続け、昼はうっ蒼たる森に隠れていた。彼らの到着少し前に破壊された居住地の場所で、彼らは煙をあげている建物の残骸を見つけただけだった。彼らは止まらず、可能な限り慎重に Yakutat へと旅を続け、八月三日にそこに到着した。その三日後には、逃げて助かったこの狩猟団の十五人の Aleuts がそこに現われた。Хлебников の計算では Sitka (Old Sitka) の住民で助かったのはたった四二人の成人男性 (дущи) と女性・子供だけであり、二百人以上が殺害された。<sup>⑩</sup>

この事件は前記の Sitka の要塞攻撃・破壊事件と一体的なものとして見なされてきた。即ち Tlingit の広範な組織的対ロシア人蜂起の一部であると。しかし Tlingit 研究の進展の結果、歴史的地域 Kwáan と居住氏族 (clan lineage House を含む) として歴史的居住地

(жигло 'Settlement' 村) の調査・発見、比定が進んでいる。<sup>⑪</sup> また Moieiy に基く氏族関係を基礎とする社会構造のみならず、Tlingit 諸氏族の伝承に基くその歴史的具体像や諸氏族の関係も部分的には明らかになっている。これを踏まえれば、事件に関しては、発生場所は Keku Streit area であり、Kake (Kéex) Kwáan に属す地域である。より広域的には隣接する Kuui (Kooyú) Kwáan への Kwáan は境界が重複し人々も密接な関係を有し、双方を含む Kake area を成してきた。従って地理を熟知し、Урбанов 隊を気づかれることなく追跡し襲撃した人々は、The Kake あるいは The Kuui の Tlingits と考えられる。また Keku Streit は今日でも、食物資源の豊富なことでも知られている。特に marin mammals (海の哺乳動物) の集る場所として評価されている。<sup>⑫</sup> 従ってその狩猟を主たる仕事としたロシア狩猟団は現地 Tlingits の攻撃対象となり得る。前者は湾・入江・水路・小島が複雑に入り組んだ Bucarei Sound から Kuui 島南部で猟を行った後ここに入り、二泊夜営をしたと記されるが、それはここでの猟の実行を示している。しかし彼らが各猟場の使用許可権を有す Kake area の各 Toionni に許可を得たか否かは不明である。無許可での猟場使用が後者の報復を導くのは、互恵主義を基本とする Tlingits 社会の基本原則からすれば当然である。従って、この事件を Sitka の事件の一部とみ見ることは問題がある。むしろ The Kuui の人々の中のある local lineage (氏族を構成する下部血族集団) による「報復」を誘発し得る事件に関する記述が、次の И.Куксов の報告書にあることを指摘しておく。これについては後述する。

一八〇二年四月 Иван А.Куксов 指揮下の四五〇漕以上のバイダール力から成る狩猟団 (Дальная партия、以下 Куксов 隊と称す) が Kodiak より出発した。この隊は事件直後 Sitka 周辺に近隣する所まで進み、事件とその前後の Yakutat から Sitka に到る広範な地域の緊張した状況を体験する機会となる。<sup>⑬</sup> Куксов は Якутар (Yakutat) から同年七月六日頃 Баранов に報告書を急便で送り、詳細な状況を

知らせた。狩猟団と現地民との軍事衝突と Новорхангельск の壊滅についての七月一日付の Куков の報告である。この時点で彼は会社の他の支配地域への危機の波及を恐れた。Нучек (Hinchinbrook 島) と Ново-Николаевская крепость (The Kenai) にも「シト力で起きた不幸」を知らせるべく同じ報告書を同時に送り、司令官に各々の地域の現地民に対する予防策を求めるのである。

この報告に基きまずこの隊の旅を追う。Куков 隊は Cape St. Elia's を通り、五月十五日 Yakutat 湾に到着。狩猟団は以後の旅の食糧調達のため湾の入口に残るが、十六日夕方頃には定住地 (Заселение) に着く。バイダルルカの修理のため五月十九日まで当地に滞在し、海路出発。同日 Дального акойского жгга (The Akkwéi の distant settlement (遠い村)。The Akwe 河岸) に着く。河口の Риф で何漕かのバイダルルカが転覆するが、積荷は濡れるが無事。しかしこの The Akkwéi の村は平穩に彼らを迎えたわけではない。Куков はここで、多様な地域から来た多くの人々が集まっているのを目にした。彼によれば Дедяной пролив (Ice Strait) の Какнаупского (Какшоуи, Female Grouse Fort) の村、Кайкаганского (Gaawtak-an, Hoonal) の村から来た人々。Якобиев остров (Yakobi Island) の様々な小村からの人々。Каканганов (Kaagwaanlaan) と呼ばれる人々、彼らは様々な場所に住み、特別な村 (жгга) を持っている。また当地 The Akkwéi の多数の人々である。彼らは Куков 隊の到着を待っていたが、その迎える態度は極めて不作法で荒っぽかった。危険を感じたため、彼はあらゆる警戒策を採りながらキャンプを張り、翌日出発を予定したが天候悪化のため出発を延期せざるを得なかった。その間に前記の村々の тойоны (toion) がテントに来て、「われわれの狩猟団員 (наших паровильков)」に対する不平を言った。その内容の第一は、後者が彼らに毎年与える侮辱、死者の側にそなえられた財産 (имени) の強奪等々である。その際、この隊ではないが、会社のシト力狩猟団員による「на жггине куковском」

(Куиуの小村での) 死者からの財産の強奪とその代償に奪ったラッコ皮が取りあげられた件を思いおこすよう彼らは言った。第二に会社の狩猟団員に関する不平と抗議である。即ち会社の狩猟団員が彼らの水域で猟等仕事を行うために、彼らは、ヨーロッパ人との物々交換から得ている衣類やその他の必要物資の大幅な不足を感じている。これらに対して Куков は自己と狩猟団員その他への弁護を行うが無駄であり、小さな贈物やタバコによる懐柔も彼らを宥められず、自らのいだちや失望を悟られぬように彼らの悪口雑言を耐えざる得なかった。さらに関係悪化を図るかのようには彼らは公然と隊の狩猟団員の積荷を盗み、力づくで恥知らずに промысловые орудия (狩猟・漁労の道具) を奪い始めた。窃取時に何度も彼らを捕えたが、叱責しかできなかった。二二日の夕方には、彼らの村を訪れていた Чюгач аликского жгга (Yalik 村の Chugach) の一人を攻撃し、ほとんど全く罪が無いのに銃の床尾でなぐった。同時に彼らはわれわれの Бергеловской (Бергелово 村出身の) заказчик の手から狩猟・漁労道具を奪い、その場所から去るよう命じた。Куков は、去るに際して Tlingit の住民から害を与えられぬよう何人かのロシア人と狩猟団員の一部を支援に送った。当地に集った Tlingits はこの部隊到着前に何漕かのバイダルルカを積荷の一部と伴に略奪し、上記の заказчик から約十フントの火薬入り大ビンを奪いすぐにバイダルルカで逃亡した。そして部隊が到着するや即ちに Tlingits により森から銃撃が開始される。この衝突は、奪われたバイダルルカと積荷の代わりに、Tlingits の почётные (身分の高い人) 二名をロシア側が捕え自陣に確保した時点で中断した。外は完全な夜の暗闇であり、その上豪雨を伴うひどい悪天候となった。ところが、上記の捕えた二人の解放を求め Куков の下に Какшоуи の村の почётные の一人が派遣されて来た。彼は解放の条件として奪われたロシア側のバイダルルカが朝までに返還され、騒動の張本人を「われわれ」の眼前で処罰することを保証した。Куков は「悪い」ことを止め、それをこれ以上広がらせぬよう「使者

の約束に基き翌五月二三日朝までに捕えた二人を解放し、バイダールカと他の積荷の戻るのを待った。

しかし彼の期待に返し両者の衝突は一層深刻化してゆく。即ち彼の前に現われたのは通常の銃、マスケット銃、長柄付槍等で武装した大量の人間だった。彼は先の代理人と結ばれた条件に基くバイダールカ等の返還要求のため、通訳二人 Нечаев と Кыбаров を派遣するが、返ってきたのは先にテントの中で Кыков に述べたと同様の「われわれの狩猟団員への不満と和解条件履行への否定的態度であった。この返答を持って使者が戻るやいなや、Кыков は適切な防衛手段・態勢を取った。そして再度通訳を送り、彼らとの和解の道を求め「われわれが平和で友好的な状況の継続と確立を希望する」が「逆の場合には自己を防衛し彼らを迎え打つ用意をしている」と伝えさせた。二度目のこの通訳派遣も成果無く、二人は送り返された。そしてその直後ロシア側キャンプへの Tlingits の攻撃が始まる。彼らは極めて近い距離にまで接近し、大胆な攻撃・強力な銃撃そして多数の槍を投げ入れた。これに対しロシア側は頑強に迎え撃ち追い払った。しかし彼らの主砲は森や丘に隠されており、逃げる敵を追ってロシア側がその場所に近づくとやいなや多数の銃とマスケット銃からの激しい銃撃が後者に対して開始された。川の向う岸を覆う深い森は敵の逃げ場の役をしており、敵をさらに追うのは不可能だった。この戦闘の犠牲者はロシア側が死者 Kodiak の狩猟団員の一名と тхалинское жигло (Tkhalka の村、Montague 島) の Chugach 少年一名、負傷者四名であった。他方敵側の死傷者数を Кыков は「信頼できる情報」に基き死者約一〇名、負傷者多数と述べる。興味深いのは、後者の葬儀(火葬)に際して行われた彼らの習慣に従った大規模な祭(ポトラッチ)で、Tlingits の人々を指揮したのが Kax'noowú' Gaaw'taak'aan (Hoonah) 及びその他の村々の тоيونы (toions) と Aakwéi の тоيونы であること、加えて最重要 (гранное) の地位を占めた者が Xutsnoowú の村の (Angoon Kwáan, Admiralty Island) 生まれで、Kax'noowú'

Gaaw'taak'aan 及び Aakwéi の様々な村に居住する者だったことである<sup>⑧</sup>。以上のように The Aakwéi の村に集り Кыков 隊を攻撃した現地民が東南アラスカ全体から集った人々ではなく、現地 Aakwéi を除くなら北部 Tlingits の一部、特に Ice Strait の両岸とそれに隣接する Yakobi 島や Admiralty 島の一部と言ふ限定的範囲の居住者だったと言えよう。

最初の衝突を経て、Кыков は森に隣接するキャンプ地の地理的危険性(森からの銃撃に対し)と大量の火器や弾丸を保有する敵 Tlingits に対する自陣の武器・弾薬不足を考慮し、Aakwéi 川右岸の Tlingits の村(おそらく Yakutat ではなく Dry Bay に近い)に近い場所から、より防御に適する、一部で砂が高く土手状を成す海側の Prip (砂州) に細長い小湾のような河口を横断して渡ることを、狩猟団を構成する toions と合議の上決定した。この会議の席で、移動中の敵の攻撃に対する防御策としてロシア人と武装した現地民の狩猟団員が防衛線を作り退却する人々を守る計画を立てるが、実際には移動決定を知るや狩猟団の Aleut 等の現地民は無秩序に仲間とバイダールカに突進し、対岸の Prip に殺到した。船に積まれていた会社の財産は多く破棄されて敵の手におちた。最後に防衛線に残ったのはロシア人だけとなる。敵は混乱状態に乗じて動き出し、急速に近づき、元のキャンプ地を占拠し、残ったロシア人と漕ぎ手に激しい銃撃を開始。銃撃の中、後者は急いでバイダールカに飛び乗り、Prip 上の予定上陸地点に何とか損害を被らず到着。直ちにキャンプを設置し、同時に土塁と流木を積み重ね敵の攻撃に対し守りを固めた。ここに引き潮に乗り敵も Prip の砂上に到着し、激しい銃撃を開始するが、ロシア側キャンプは高所にあり、前記の防御用堡塁にも守られ、この攻撃に耐え被害は無かった<sup>⑨</sup>。

五月二五日、前述の Tlingit 側から和平交渉のため代理人が派遣された。代理人に選ばれたのは Павел Родионов<sup>⑩</sup>、おそらく Kodiak 島に人質として滞在していた時にキリスト教に改宗した Tlingit と

ある。報告書によれば、選んだのは前記の The Akwéi に集った Ptingts (原文では kollokskie) である。軍事的には優位にあった彼らが和平を急いだ事はロシア側には幸福と言える。この理由を Kycov は「ちょうど今が彼らが魚油を調製せねばならない時だった」と述べている。これは春 Cook Inlet 以南のアラスカからカリフォルニアにかけての河川を太平洋から産卵のため遡上する Eulachon ⑧を指すと考えられる。この魚から独特な方法で調製される Eulachon oil はこの地域の現地民にとって内陸との交易の最重要商品であり、そのルートは「grease trails」として知られている。従ってこの時期は彼らにとって、漁・魚油作り・交易に従事する繁忙期であろう。また当地に集った Ptingts は、この魚の遡上する河川の無い地域の出身であり、従ってこの仕事に従事することは彼らにとっても重要であったはずである。ともあれ、Родионов が、ロシア側の条件である人質交換と奪われた会社と狩猟団員の所有物の返還を受け入れこの戦闘は終わった。続いて二名ずつの人質交換が行われる。Ptingts 側の人質は次の二名である。① Gaawtaakaaan (Hoonah) の toion の息子。また彼は Kakhnoowí の toion ⑨ Kaagwaantaaan clan に属する者の甥。② Kakhnoowí の別の почётный の息子。他方ロシア側の人質は Kodiak 島の住民二人で、аврогити жигла (Ayakulik 村) の出身者とキリスト教への改宗者だった попкацкий (Shashkat ⑩) Ereweii である。しかし奪われた財産の返還は半分以下であり、Родионов は残余半分をこの狩猟団の帰途に返却すると請け負った。Kycov は彼の言を疑っていたが、多くの理由があり受け入れを決断した。理由は第一に彼らを鎮静化し、海岸沿いの人々の間に敵意がこれ以上広がらぬようにするため。第二に時期を失すること、第三に充分な量の防衛用の武器と火薬、銃、弾丸の欠如だった。その上狩猟団員達が Якутар (Yakutat) に戻ることを主張していた。食糧を用意し、必要な物資(バイダールカに積まれていたが、キャンプの移動の際にはほとんど残してきた)を再調達することが理由である。結局彼もそれに

同意し、五月三〇日にこの Pifp を隊は出発し、順調に Якутар に戻った。

二五日から三〇日の間、和平が成り、その条件の実行が成された後も恒常的な暴風雨等の悪天候が隊をこの場所に足止めした。この間に、新たな人質やその他の人々から、以下の情報が彼の耳に入った。彼らが何人かの男を海岸沿いに徒歩で派遣したことである。Angya (Ltu-aa, 現 Lituya) ① Ледяная бухта (Ice Bay ① 現在地特定不可) Ледяной пролив (The Ice Straits) の入口の岬、そこから Лядной пролив ② ③ Kаукаганским (Gaawtaakaaan) ④ Хупновским (Kutsoowú) ⑤ ⑥ Ляхтарская бухта (“Chilkat Bight” ⑦ ⑧ Chilkat area と現 Lynn Canal を指す) ⑨ Yakobiev (Yakobi Island) までの住民に、通知するために。前者(人質)は使者は単に「Angya と Ледяной ① で人々がわれわれと会おうのを避けられる」ように送られたと説明。他方その他の人々は、実際に前述の場所すべてに使者が派遣され、住民に伝えたとは言っていたが、伝えたのがいかなる意図で、即ちわれわれと戦うのかそれとも単に用心深くしていることなのかは断言しなかった。これは、Litva Bay area から Ice Strait 西岸と Yakobi Island、そして北の Chilkat と南の Angoon ① ② で意図不明ながら使者が派遣され廻っていることを、あいまいながら Kycov に知らしめ、周辺の Ptingts の攻撃への懸念を強めさせたことは伺える。例えば、彼は The Akwéi の村に人を派遣し状況をさぐらせている。最後に彼の懸念対象の Ptingts は The Akwéi での攻撃に参加した地域とそれに隣接する北部地域のそれであり、南部 Ptingts は含まれないことを確認しておきたい。

Yкутар で、バイダールカの修理・食糧の準備・銃や火薬・弾丸・弾薬筒等軍需装備品の補充、さらに人質と病人を残し、三人のロシア人を加えて六月六日にこの隊は再び前回と同じルートに沿って出発した。その時 Kycov は、当地の司令官 Мухин に用心深くあるよう命じ、移住者 (носельщики) には定住地を離れることを禁じ、警戒心

を示した。

同日に先の Pif と河口 (The Aakwei 河) の先端に到着し、逆風や嵐のような悪天候のため留まり、十二日に出発。海岸沿いに Sopka Markovskaya (おそろく Mt. Fairweather) の下を進んだ。その間狩猟団は獲物の探索と狩猟を行っていたが不猟が続いた。六月十五日に Ледяной пролив (Ice Strait) の先端の岬 (現 Cape Spencer) に到着。この天候悪化により足止めされる間に、季節的一時滞在中の Kakhnoovi と Gawtaak'aan の村の住民に遭遇。彼らの様子からは「彼らが隠しているのか、それとも遠い акойское жигло (Aakwei の村) で起きた事件を知らなかったかはわからない」。ロシア側は Gawtaak'aan (Hoonah) の村の toton にのみ質問したがそのことは知らないとの返答だった。その後 Кусков は他人々と話をし、多くのことに興味を引かれた。その中で一人の老人から以下のことを知った。「Ледяной пролив の сия とよばれる湾に多くの人々が様々な村から集っていた。その中には хуцновских (Kutnoovi からの) 人を乗せた、十漕以下の大きなバイダールカや ситхинских (Sitka からの) 二人がいた。彼らはわれわれの隊の到着を待っていた。彼らはまるでわれわれやわれわれの狩猟団と物々交換や交易を行うことを望んでいるかのようである」と。しかしこの情報には彼は疑問を持っていた。Kutnoovi (angoon area) の人々はめったに自分の村から離れないので。しかしこの老人はさらに述べた。彼ら自身が遠い Sitka (Ситха) の向うに住む、глинские (Stikine の) と呼ばれる人々から現在危険にさらされていること及びこの人々やその他の人々が非常に多数で、Sitka に攻撃に行くことを計画しているようであることを。しかし攻撃の対象が Sitka の村の居民か、それともロシアの Новорхангелская крепость かは明らかにならなかった。しかし Кусков は最初の経験もあり慎重になつており、おそらく何らかの危険の存在を状況から察して、Sitka (Old Sitka) の要塞司令官 Мерведников に六漕のバイダールカを派遣

し、自己の隊に旅行中にふりかかったことやその他の事について詳細に知らせることに決めた。その知らせの中で、Sitka にまだ残っている狩猟団がいる場合、それをこの隊と合流するよう送ること及び合流ルートや合流地点を指示した。このようにこの時既に Old Sitka のロシア要塞は Tlingits の大規模な攻撃により壊滅していたが、彼がその情報はもちろんそれに伴うこの地域の Tlingits の変化も感じていないことは明らかである。もちろん合流へのルート設定では居住する諸氏族からの危険の有無に細かく注意を払ってはいるが、Tlingits との全面的衝突の危機を考慮しているわけではない。但し Баранов に銅製大砲一、角砲及び銃と槍、並びに Tlingits 語の正確な翻訳のできる通訳の送付を要求しており、戦闘の可能性を排除していたわけではない。

六月十七日午後、手紙と小包みを携え任命された六漕のバイダールカが Sitka の要塞へと派遣された。指揮は папкацкий (Kodiak 島 Shashkat 村出身の) Еремей Кочергин に委ねられた。彼の指示は、前記の要塞に急いで到着し、帰途は Якобиевский пролив (現 Lisianski Strait) の入口の南側又は Чагине острова (現 Salisbury Sound) で本隊に合流、そして航行中 Lisianski Strait やその他の場所に居住する現地民との遭遇を避けるべきことだった。他方、翌十八日朝本隊は Якобиев (現 Yakobi Island) へと出発した。Якобиевский пролив の入口を集合場所と定め、狩猟団はこの海峡に面す Аполосо жигло (Apolosovo 村、今は無い Tlingit 村) 方向に進み、そこで十分な量の毛皮獣を発見し、天候が悪化するまで半日間猟に従事。こうして集合地点に向って進む間に ラッコ (Марок и коллон) 一三〇頭を獲得。翌十九日、狩猟に適する静かな天候のため夜明けと共に狩猟団を Yakobi Island から Sitka 側に送った。Sitka (要塞) に派遣したバイダールカが戻るまでに、Salisbury Sound 近くで毛皮獣の探索を行うために、集合地点は Salisbury Sound の Yakobi Island に近い側の場所に定めた。こうした狩猟団の

働きにもかかわらずここまでの通過中に様々な場所で獲られたラッコは全部で三五〇頭で、猟は成功ではなかった。他方、この隊の通過中に二漕の *sikhingkie* (*Sikka* の *Plingit* の) バイダーラが追いついた。彼らは自分の家に行く途中であり、*Sikka* を十日程離れ、*Yakobi Island* で魚の保存食糧を用意していた。そこへの彼らの出発前、即ち六月初めに *sikhingkie partia* (シトカ狩猟団) が派遣されたことやその隊にロシア人三名とイギリス人あるいはアメリカ人の一名がいたことを彼らから知った。この *Plingits* は訪問することを約束し去った。彼らには敵対的態度はこの報告書から判断するなら全く見られない。

翌六月二〇日、*Kyskov* は猟の獲物の乾燥と狩猟団員の休息のため隊を止めた。加うるに天気は朝から北風が吹き、午後には雨が降り出した。そこへ、*Sikka* に派遣されたクスコフ隊のバイダールカが六漕中五漕だけ戻って来た。それは *Новоархангельская крепость* の壊滅を伝える不幸な知らせをもたらした。その隊の人々への衝撃の大きさを *Kyskov* は次のように書いている。「われわれとわれわれの狩猟団員は不幸な知らせに打ちのめされた。そして戦慄せずにはほとんど言うことができない。このことを、*Sikka* にあるわれわれの *Ново-Архангельская крепость* とすべての建物は灰になってしまい、人々は殲滅されたことを。この不幸な知らせを聞いてほとんど気が動転してしまった」と。続いて派遣された人々が「血に飢えた野蛮人の手からやっと逃れた」経過が記される。これは前者からの聞き取りに基づくと考えられる。彼らは *Якобский пролив* (*Jakobski Streit*) 通過中に一人の *Plingit* 遭遇した。彼は完全に(事件について)暴露したのではないが *Sikka* に日中到着することは危険であり、そこは、悪い危険な状況にあるにちがいないと警告してくれた。そこでこの情報を考慮して、彼らは十九日の夜明け前に (*Old Sikka* 近くに) 到着し、*Гванская бухта* (現 *Starigavan Bay*) の岬に停留し、建物が灰となり、残余物はまだ煙がくすぶっているのを目にした。そこで

この岬に着岸し、バイダールカを森に隠した。助かった者がいないか知ることが必要なので、*Erewei Koceryin* はバイダールカで、海岸から少し離れ沿岸を航行し、湾を横切り直接元の建物に針路を取るつもりだった。そこに、非常に多数の人々がいるのを眺めていると、海岸から人々を乗せたバイダールカ一漕が出て、彼の方に向って来たので、急いで海岸に戻り岩に着岸し、バイダールカと伴に森に隠れた。彼を追うバイダールカ以外にも湾や海岸を多くのそれが行来し、湾に面する島々にも人々の乗ったそれが多数あるのを彼は目にした。しかしそれ以上何も知ることができず、夜の到来を待ち、彼らには出発し、*Plingit* の目を避けて *Баранов пролив* (現 *Neva streit & Olga streit* と推定) を過ぎるや海上に出て集合地点を目指した。また一漕のバイダールカ (*Nukomiuk* 村の *Chugach*) が休息のためにこの海峡近くの小島に停まったが、それきり見えなくなった。*Plingit* に殺されたかあるいは捕獲されたかであろうと考えられ報告された。

この不幸な知らせを得て、*Kyskov* は、今後の隊の行動に関して、何人かの *почётные тоионы* を自分のテントに招き、隊が前進する場合の狩猟団員の対応について意見を求めた。彼らの答えはあいまいながら、狩猟団員の信頼性の低さを示すものだった。また、狩猟団員(多くが *Aleut*) の中には非常に大きな動揺が生じていた。彼らは親族や友達の運命を嘆き悲しみ、号泣していた。特に *sikhingkie partia* (前記の壊滅した *Урианов* 隊) の団員の運命を心配して。その上彼の懸念がさらに三点あった。第一は *Yakutat* が *The Akwei* の人々やその他地域の人々 (*народы*) からの脅威に晒されており助けが必要なこと。第二はこの隊の *Sikka* への南下の動きは、海岸に特に *Ice streit area* に居住する多数の人々が知っており、このことは *Sikka* 側に既に伝わっていること。第三は攻撃側の *Plingits* は充分な銃と弾丸の他に重い大砲も保有すること。従って、挟み打ちにより包囲されぬよう、また狩猟団員を不幸な運命に陥らせず動揺を静めるには *Yakutat* への帰還しか他に方法は見いだせず *Kyskov* は決断し



た。この隊は即ちに Yakutat へ出発し、途中一漕のバイダールカが隊から離れてしまったが、多くの狩猟団員の意向もありその帰るのもまたずに、漕ぎ続け三晝夜かからずに到着した。

隊が Yakutat 定住地に到着するや司令官 Николай Мухин は伝えた。この隊の再出発後まもなく The Akwéi とその他の地域の住民が Саровая речка (現 Situk river) のヤクタート (Якутацкие) 住民のもとに大挙して到来し、目的は Саровой жип (Situk river) の油の意味、魚油であろう) の購入であったことを。ここでも季節的要因として Eulachon oil の調整や購入は極めて重要だった。また、Фёдор<sup>(23)</sup> にも The Akwéi とその他の地域の住民の当地への到来について、Мухин はその数や「われわれに対し何らかの有害な企て等を持っていないか」を知らせてくれるよう頼んだ。彼は双方の現地民を信用してはなかったからである。数日後 Фёдор が人を送って伝えてきたのは「到来した」ことだけで他には何もなかった。最初の出発時にも Фёдор は Куков 隊と「遠く айойской жипо」で合流する予定だったが、 Якутар に近い方の Akwéi (Akoi) の村から Situk 川下流へ行ってしまった。Куков に知らせようが Мухин に言い訳をしようとの時点で彼の挙動は不信感を生むものである。前者は明白に The Akwéi とその他の地域の住民の企て、即ち Куков 隊攻撃を知っていたためと断じている。ちなみにこの隊再出発の時も彼は同行に同意し、先に Situk 川に行き、その河口を隊が通過する時合流する約束だったが、そこを過ぎ Akwéi 川河口で待っていた隊の下に現われたのは代理の兄弟 Михайло だった。後者は兄弟 Фёдор が The Akwéi とその他の地域の住民の到着を待ため同行を断ることを伝えた。以上のような、ロシア側にとって近い人物と考えられている Фёдор の挙動は、Якутар のロシア定住地も現住民との関係では不安定要因を抱えていたことを示す。それは次の事実でも伺える。

Куков によれば前記の [айойские и прочие] はわれわれの Якутар 帰還を知るやたちまち、ほとんど少しもためらうことなく、自分の

айойские жипы (The Akwéi の村々) へ急いで去っていった。彼らに (私は) 使いを送り Павел 一人だけでも (当地に) 来るよう求めた。たとえ他の тоيونы (toion) がここを訪問したがるにせよ、これも」これに対する Павел の返答は、来訪を渋るものだった。

この返答に関して、彼は狩猟団が出発するのを待って、Yakutat のロシア定住地を攻撃する計画があったのではないかとの疑念を表明している。理由は彼らが、シトカでの事件の情報を得ていたからである。Yakutat 住民のロシア人への忠誠心を айойские のそれより信頼しているが、後者が攻撃を行った場合前者の抵抗が不可能との懸念を彼は持っていた。従ってこの定住地に迫る危険を感じ以下のように述べる。「当地の定住地に人々を残すことには危険が無いわけではありませぬ。Айойские и прочие が自分の住居を去らないので Дедяной против から何らかの支援を待ちうけているのではないかと私は疑わざる得ないのです。そのために当地にしばらく狩猟団とともに留まります」<sup>(24)</sup>。とはいえ彼の滞在理由は、Мухин と移住者グループの対立による定住地の内部秩序の混乱を收拾する必要性に迫られていたことにもある。当地のロシア定住地は内憂外患状態にあったと言える。

さて、この報告書の記述で注目すべきは、これに現われる Tlingit 社会の親族関係ネットワークと広い交流である。より多くの人質を почённые 住民から取る事が可能であり、Kodiak に送り届けるこの話が続いていくつかの例が登場する。まず先の Фёдор の疑わしい態度に関して、その Kakhnoowú の toion との親戚関係、即ちこの toion の息子が Фёдор の娘を妻にしているため彼らの企てを知っても暴露しなかったと推測する。次に Куков が小さな贈物を与え御機嫌を取った Хаткейк (Kalgéikw) の親類の二人の айутацких (Yakutat Tlingits)。彼らは the Akwéi の村の居住者であり、去年の冬は the Kakhnoowú の村に滞在した。そしてそこからバイダールで先の Павел やその他の人々と一緒に Стягин (the Stikine) に行き ирпушка (遊び、おそらくポトラッチ) に招かれた。そして

Stykin からの帰途に、彼らは Кузовское жили (The Kuiv の村) に立ち寄りそこから Xutsoowú (Хуцноское жили, Angoon area) に到着。続いて報告書は「そこには Tygin と呼ばれる大きな島(おそらく東南アラスカ南端の島 Dall Island) の様々な村の人々がバイタールで集合していた。Tygin は Bobrovaya бухта (Bucarell Bay) の近くで Шарлоттские острова (Charlotte Islands) の向いにある。その toion は Kanapit (おそらく Kanayagish) の名で呼ばれている。」と述べて行われた Pingit 居住圏の南端から一部 Haida や Tsimshian の勢力圏にまで及ぶ南部地域の人々の集会に言及する。即ち、そこに集っていたのは前記の他に「第二の Кузгарагачене(やその他の村の toion)」「まじ、Kuiv (Каюгоро), Skine, Kake (Kakekoro) の toions、独特の異なる言葉を話す人々 (народы) Skine の隣人、Chuchkan (Чучкан, Tsimshian) と呼ばれる人々、そして The Xutsoowú の隣人である多くのその他の人々。但し北部では Kax'noowú と Chilkat (чилкатских) の toion は参加していません。そして、Old Sika の「われわれの Ново-Архангельская крепость (要塞) と主要なアメリカの狩猟団の破壊・殲滅」について話合いがもたれ、計画が取り決められた。取り決めは以下の通りである。①春が到来したら決められた時に全員が Xutsoowú の村に集合。そこからわれわれの要塞に進み、сигхинская партия (シトカ狩猟団) を待ち受け、要塞への攻撃実施。② Sika Pingit 住民がこの攻撃に参加せぬ場合は彼らも殲滅すべきこと。③数が多いためその場で全員を殺すことは不可能であるわれわれの狩猟団に対して取るやり方は、帰途 Sika 近く、Погибший пролив (Peril Strait) あるいは他のどこか適当な場所できり囲み粉碎し、水中に沈めること。④要塞殲滅を知ったら(その攻撃を)行う。まずはじめに Деланий пролив (Ice Strait) におびき寄せて。続いて前記の Skine toion (стыкинский тоюн) が多量の火薬・弾丸及びその他の軍装備品を供給し、toion 各々にいくつかの大砲を分配。さらに集会が行わ

れた Xutsoowú の村に残された大砲(複数)とイギリス人あるいはアメリカ人から彼が手に入れた武器と軍装品すべても分配。ここで Кузов は上記の武器の供給を行った外国人について、остров Tykina (the Island of Deikeena) の彼らの近くに移住し、要塞と船を保有し、そこを拠点に交易のため海岸沿いに航海していたと、定住し、拠点を置いて交易する毛皮―武器商人の外国人の存在に言及する。上記拠点場所は今日、Dall Island の南端の Haida の村 Kaigami に比定されており、ここは毛皮交易の間アメリカ北西岸の最も有名な港の一つだったと言われる。これは南部 Pingit の「land」に隣接する Haida 地域に拠点を置く外国船(特に英米船)が日常的に毛皮交易に来訪したことを示す。さらに報告書は次に、Xutsoowú の村で越冬したアメリカ船が住民に交易用のラッコの量的不足を理由とする来航中止を予告し、また前記の Old Sika の要塞とロシア狩猟団の殲滅を扇動したとの情報も書く。ただしこれらの情報は不正確と認めている。Кузов 自身の意見も「それが真実か彼ら自身の作り話かはわかりません。おそらく真実でしょう」だった。

次に報告書は Sika 要塞攻撃計画と Yakutat のロシア人定住地攻撃(未実行)の関連性に触れる。前記の攻撃の取り決め後 The Skine toion (報告書は攻撃計画の中心人物とみなす)と彼の共謀者達が The Akwei の toions の「Честныя и Оспя」に火薬と軍装備品を送り、それは前記 Sika 要塞破壊を知るや、Yakutat のロシア定住地に彼らが同様の攻撃を加えるためだったと。

Кузов には前述の事の真偽は不明である。おそらく情報は Pingits からの伝聞に基づくからである。しかし彼は Pingits の中にロシア人や狩猟団を構成する Pingit の支配領域外の北部の現地民、特に Aleut に対する敵意が広がっていることは認識していた。従って彼は敵意の原因等を具体的に指摘する。それは Мелвединых の手紙が知らせており事実である。第一は Sika 狩猟団員が The Kuiv の村で墓地の死者の傍に置かれた所有物の窃盗という墓荒し行為で

ある。これは気づかれ代償としてラッコ皮が取りあげられたが The Kuin の人々の感情を著しく傷つけたことに間違い無い。第二は、The Kuin の toion とその妻子の殺害事件である。これは①の少し後あるいは同時に発生した。五月十九日に彼が受け取った手紙に書かれており事実と考えられる。これに関係し、彼はわざわざ The Kuin の村の Toion は The Skine toion の姉妹を妻にしていると書き、事の重大性を伝えようとした。Tlingit 社会ではこの殺害は The Kuin の toions と The Skine toions 双方に、ロシア人やロシア狩猟団員への復讐が義務と見なされることを意味するからである。次に彼は The Xutsoowú の人々がわれわれに敵意を養う理由に言及する。それは一八〇〇年あるいは一八〇一年に起きた盗みのかどでその地の toion の甥が逮捕と鉄鎖につながれる懲罰を受けたことである。これも復讐としての攻撃の誘因となり得た。しかし Kycov と The Xutsoowú の人々は単独ならて(要塞攻撃)を実行しなかつた。この主因を The Stikine の人々と The Xutsoowú の人々の親族関係の変化に求める。即ち両者は以前は絶えまない戦争状態にあり停戦時には人質交換を行っていた。少なくとも去年の夏までは。しかし今や The Skine の toion 息子が The Xutsoowú の toion の娘を妻とするにより両者は親族関係により結ばれている。この前述の Павел Родионов と二人の Yakutat Tlingits の証言が登場する。彼らは前記の The Xutsoowú の村に滞在し、Sitka 攻撃を取り決めた会議を見聞した後 Sitka に滞在。その彼らが伝えたのは、The Kuin と Kake の村の人々が狩猟団を攻撃しようとしたこと、及び「The Xutsoowú の人々もわれわれに不満を持っている。彼らより多くの動物を獲っていること。」<sup>(10)</sup>それ以外何も言わなかつたが、狩猟問題も Tlingit の敵意の要因であることを改めて確認させる発言である。

六月二八日夕方、Yakutat に戻る途中遅れて行方不明となつた The Kainai の村の人々のバイダル力が帰還。彼らの行動は次の通りであつた。遅れて Kycov 隊の屯営地に着いた時既に隊の出発後のため

自らの進むべき方向に迷つた。そこで Sitka に派遣されたバイダル力が戻り、その報告で隊が Sitka に向つたと考え、そこに向う。現地の人々に遭遇するのを避け慎重に航海、夜中に Sitka 近くに着いた。そこで元の要塞場の惨状を目にし、急いで Гаванская бухта (おさらへ Starrigavan Bay) の岬に行動した。この Kodiak 島の the Aitak 村の男 (Konigi) を発見し、連れ帰ってきた。彼は以前 the Aitak artef で通訳を務めていた人物であり、おさらへ Tlingit 語も解したと考えられる。

この the Aitak 住民から Kycov は Sitka の要塞の破壊と人々の殲滅状況を確認した。その住民の発言で注目すべきは The Skine の人々等の攻撃に関して事前に多くの警告やうわさが司令官 Мервединков や他の要塞の人々になされていしたことである。彼によれば「冬の間ずっと通訳 Дарья と Анюшка を通じてうわさが流れていた。遠方の тыкинские (The Stikine の人々) とその他の人々 (народы) が要塞と狩猟団に対し攻撃を行なおうとしている。そして ситхинский тойон (The Sitka toion) Михайло (Shk'awulyell) が Мервединков に対してもわれわれの кадьякские (Kodiak 島住民 Konigi) に対しても何度もくり返して同じことを言っていた。しかし彼らはすべてを無価値なものと見なしていた。」<sup>(11)</sup>のみならず事件の直前の数日前にも「遠い Сучьем камне (Sea Lion Rock) にアシカ猟のために居た Василии Кочесов の下をひどい嵐の中訪れた Sitka 住民が、「тыкинские (The Stikine の住民) とその他の人々が攻撃を行いにやってくる」と言いすべかつた。また、前者の下へ仲間と派遣された彼が、Якобиев (Jakobi Island) から航路を進んでいる時にも Sitka 住民に同じ事を言われた。この The Aitak 住民は最後に自らの悲惨な逃避行を報告書で語つた。六月十日頃 Уробинов 等四人のロシア人と一人のイギリス人の狩猟団(彼も含む)はバイダラで Сучий камень (Sea Lion Rock) に派遣された。それは滞在と往復で約七日間要し、帰途には Sitka の面す湾の岬で、病気のため

狩猟団からとり残された *Килдинское жигло* (The *Kiluda* の村、*Kodiak* 島) の住民の声を聞きつけ、彼をバイダールラに乗せた。彼から初めて前日起った要塞壊滅の事件を知ったが、すぐに背後から追ってくる大量の人を乗せたバイダールルカを目にする。ここからこの狩猟団の逃避行が始まる。*Tlingits* の追跡を振り切るため *A. Кочевов* もバイダールラに乗り移り帆とオールを使い、途中で積荷の一部を投げ棄て湾を漕ぎ渡った。しかし *Tlingits* の船は迫り銃が撃ちかけられ始めた。狩猟団は湾の先端の岬に上陸し、いくつかの集団に分かれ森の中に逃げ込んだ。仲間はばらばらになり、その後についてはあの *The Altak* の住民は自己の体験のみを語る。彼は最初 *Барым* と一人の *Капор* (現地民の漕ぎ手) の三人で森の中を移動し、要塞近くの小高い場所に登り草と根だけを食糧に四日間過ごした。おそらく海上から逃げるためバイダールルカかボートを見つけようと彼は前二者と別れ一人となり、先の上陸した岬に行くがバイダールルカは見つからない。その場に二日間滞在していたが船も見なかった。前述のように彼はそこで到着した *The Katmai* バイダールラに救われた。そのバイダールラは夜を待ってから *Salisbury Sound* の島々の間の海峡を通り出発した。会社の「*Екатерина*」号も含め船の姿は見かけない。

*Кучков* はこれも含め *Yakutat* にたどり着くことができたこの事件の生き残りの人々の話や戻ってきた *Sitka* への派遣隊の情報等から、*Sitka* 周辺に、生存者の搜索と救出のため危険だが、バイダールルカ船団派遣を決断する。「森をさすらい飢えのため疲れ果てているわれわれの苦しんでいるロシア人と *Кальяксские* (*Koniagi*) に救いの助けを与える他の手段を見つけないことができず」と。そして指揮下の *Koniagi* と *Chugach* の狩猟団員の何人かに参加を説得。続いて多数が自発的にこの搜索—救出隊への参加を申し出た。彼はこの中から最も敏捷な者三六人を選んだ。その中には上記の *The Altak* 住民も含まれる。こうして十二漕の三ハッチ式バイダールルカ船団が六月三日 *Sitka* へと出発した。彼は生存者の発見に期待を持っており、また

この仕事は、現地の *Tlingits* に見つかり難い少数の船団であるから可能と見ていた。そして七月十日までに彼らは天候が妨げなければ、*Yakutat* に帰還すると予想していた。

しかし *Yakutat* のロシア人定住地ではここに狩猟の成果も無しに留められた狩猟団員の間で不満が高まっていた。*Chugach* の二漕のバイダールルカが既に脱走していた。*Кучков* は非常に費用のかかる *Табак* や *Пропка* (嗅ぎタバコ入れ) を *топон* や *заказчик* に贈り彼らを引き留めにかかっていた。しかし「狩猟団をさらに引き留めておくことは不可能」が彼の判断で、この報告執筆の時点で *Kodiak* 島に出发する意志を固めていた。彼の存在が抑えていた、*Yakutat* のロシア人定住地内の司令官と植民者の対立が收拾されたかは不明であるが。前述のように先ずこの報告を携えたバイダールルカ三漕の急便が七月六日に予定遅れで派遣された。直後に彼が待ち望んだ「*Екатерина*」号がようやく *Yakutat* に到着したと考えられる。彼の予想とは異なりこの船を *Баранов* が *Yakutat* と *Sitka* に *Kodiak* 島から派遣するのは六月二一日である。従って *Yakutat* 着が七月以降なのは当然である。ようやくこの船で *Yakutat* に留まっていたこの隊の狩猟団は *Kodiak* 島に帰還した。それは報告書の予定より遅れ九月五日だった。

#### 四、*Sitka Tlingit* の口承伝承に見る事件像—総支配人 *A. А. Баранов* の課題

*Old Sitka* のこのロシア要塞壊滅事件(一八〇二年)は、攻撃の事実関係はロシア側と *Tlingits* 側双方の史料に一致点が多く争点は少ない。しかしその原因と総体としてのこの事件の性格に関しては、二十世紀後半以後の *Tlingit* の口承伝承の採取と活字化の進行やロシアの史料の新刊行により従来の解釈の変更に必要性が顕在化している。それを加速しているのは、十八世紀以降の *Tlingit* [land] と *Tlingit* の文化人類学的調査・研究の成果である。今日、*Tlingit* 社会

の構造や慣習・文化を考慮してこの事件を解釈することが必要となっている。

では本稿の最後に Tlingit の口承伝承でのこの事件の解釈に触れたい。これは一九七〇年代に録音された Andrew P. Johnson の録音時代の異なる二編の語り (英語) である。彼は第一編で自分が Kiks-ádi (Raven moiety clan) であり、この戦いで前述の Tlingit 側のリーダーの一人とされた Shkawlyei の家系に属することを述べる。従って彼の語りはこの戦いに参加した氏族の口承伝承であると認められる。この二編に共通することは第一にこの戦いが、Sitka の支配的氏族 (clan) Kiks-ádi の戦いであること。他の Tlingit 諸氏族に関しては、他地域居住者どころか Sitka 居住者の参加も言及されない。但しこれに登場する三人の戦士の内、父方として二人が Kaagwantaan (Eagle moiety clan) の親族であり、一人は Chookaneidi (Eagle moiety clan) の親族である。この父方の親族の戦いへの参加の可能性は無さとは言えぬが、この語りには全く登場しない。この点で先に Kycov が報告で述べた The Stikine の toion 主導の攻撃計画とは異なる。このでの戦いの主役は第一に Shkawlyei の甥 Kalyaan である。前者を語り手は「the head chief of the Kiks-ádi」と呼び当時のこの氏族の首長的地位を認める。両者は同じ The Lukeetaan (People of the Point House) に属し非常に緊密な血族関係であった。その他「戦士として」Stoonook と Dukaan が登場し、その勇敢な戦いと死が強調される。次に第一編でのみ語られる攻撃の理由に移る。まず、ロシア人が Tlingits に対して極めて残酷であり、Tlingits が約束を守るのに反して約束を守らぬこと。さらに Tlingits の女性に対する森の中の強姦行為とそれによるロシア人の血を引く Tlingit の誕生。次に彼らへの侮辱に対する報復。その中には、Stoonook が Kukwan (Chilkat area) に居住する父の氏族の人々を訪問した時に「彼らから「ロシア人に支配されている人々」や「おまえ達はあのロシア人へへつらってきた」と侮辱されたことも含まれる。従って外

国人の扇動や経済的理由もこれには現われない。

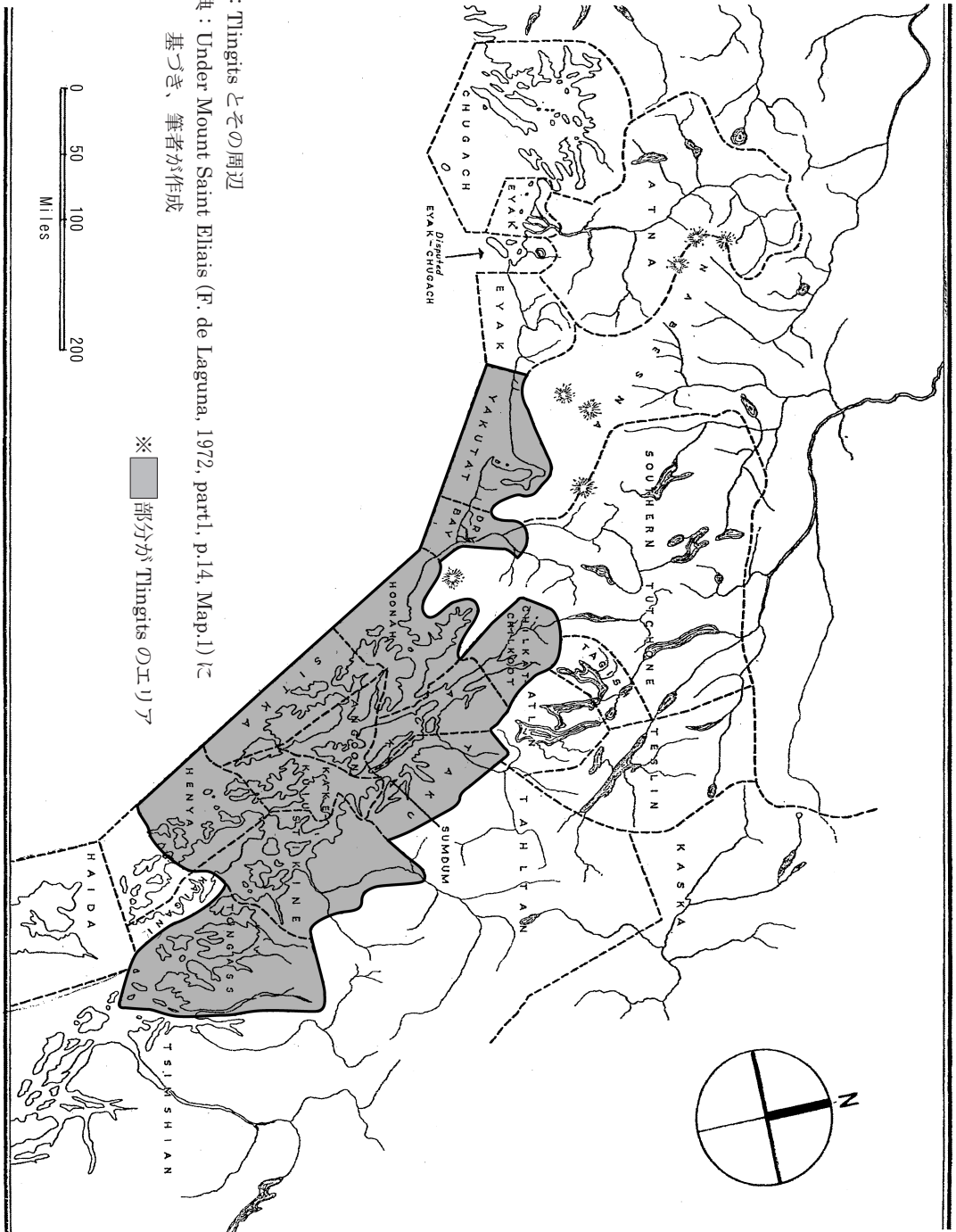
この二編の第二の特徴は、Aleut への憎悪と非難である。両編の後半部の大部分が Aleut 非難と Gidák (銃の名手、ロシア名 Бачинин Кочев) と彼の補助員 Aneceñ Erreberkin (双方 Aleut) の捕縛と虐殺の経過である。特に第一編では Aleut を「まず貸した島の汚染行為で非難」、後半には「助け世話した人」Tlingits への裏切りを批判。警告無しにロシア側に加わり、ロシア人に強制されては無く、積極的に彼ら Tlingits 殺害に関与しているとの見方を示し、そのため「The Tlingit は彼らを殺すために全員出て行った」とする。また同じ理由で子供達の Gidák 虐殺への参加も記す。虐殺後も両者の遺体を海に沈めるといふ彼らの慣習上遺体への最大の侮辱行為が行われる。そして最後に Tlingit の慣習では被害者は生きている限り必ず復讐を行うと報復行為の正当性を語る。従ってこの二者虐殺は、当該 Tlingits の Aleut への当然の復讐とされる。事実第二編の最後に、これを「The Kiks-ádi's、これは復讐だった」と断定する。

Tlingit の伝承が示すのは、これは Sitka Tlingit の中の Kiks-ádi clan のロシア人に対する復讐と、それにロシア狩猟団の主構成員でロシア人側の加担者が見なされ、且つ生活習慣上のトラブルもある Aleuts への報復が加わった Kiks-ádi の攻撃である。加害対報復(復讐)は Tlingit の社会の基本的習慣である。彼らの間でもこれによる氏族間の戦いや講和のための人質交換は希ではない。

以上のようにこの事件と重なる時期に各地域で Tlingits が集り、反ロシア狩猟団の謀議を行ったり、時には後者を襲撃する事件を実行したことを否定するものではない。しかし Yakutat から Haida area に到る広域で計画的組織的に実行された反ロシア人蜂起とこれを見なすのは問題である。実は Sitka Tlingits も全員攻撃参加したのではない。むしろ対ロシア人問題でも地域により個別の問題を抱え、解決のため親族関係のネットワークを通じて、いくつかの地域のいくつかの氏族が集合し、「報復」を行ったことはあり得る。時には

集合の理由が The Dakwei のように魚油生産・交易や鮭漁という季節要因であり、襲撃の理由が「報復」であるか不明の場合もある。また外国人による扇動説は前述のように根拠薄弱と言えよう。しかしロシアアメリカ会社が支配領域と見なすようになった Tlingit [Land] が従来通り現地民の慣習ルールや氏族間対立が支配する世界なら、ロシア領アメリカはロシア帝国の統治外にあると言わざるを得ない。この状態の克服には何よりも破壊された要塞の奪回によりロシアの軍事的報復を行うことが必要であり、おそらく Baranov はこれを理解していた。これ程の敗北に対し報復ができなければこの地域でのロシアの権威を保つことは不可能であり、おそらく Tlingit 諸氏族のみならず Chugach、Tanaina 等のこの時点では何とか会社には服従している現地民も遠からず離反する恐れがあった。Хлебников は伝記の中で Baranov の決意を「この喪失の衝撃をよく考えて、彼は機会あれば一番にこの定住地を再占拠すると固く決意した。彼が望むのは、外国の交易商人の眼前で国（ロシア帝国）の名声を保持し、政府と会社が彼に置いた信任を維持し、交易と狩猟を拡大し、利益をそれにより生み出させ、こうして祖国に新たな奉仕を行うことだった<sup>10)</sup>」このためには、必要な軍事力・能力があり忠実な人間・物資の供給が緊要な課題だった。幸運にもいくつかの会社の船が一八〇二年に Kodiak 島に来船し、一二〇人以上の狩猟員と物資を補給した。Utalashka 島から [Ogra] 号、九月十三日に Oхотск から [Св.Александр Невский] 号 (Штурман В.П.Перов) として十一月一日に [Св.Елизавета] 号である。特に後者は海軍士官 лейтенант Н.А.Хвостов が指揮した。その上同年会社は株主総会の決定により、Baranov を正式にアメリカと島々にある定住地全ての総支配人に任じ、全権を与え、それは指令書でアメリカの彼に伝えられた。だが軍事力不足と統治のための人員不足は重大であり、この地域でのロシア国家の支配の確立への道は不透明と言わざる得なかった。しかしともあれ総支配人 А.А.Баранов は、失われた Sitka の

Михайловская крепость と定住地を奪回し、Kiks'ádi clan への報復を行い、ロシア国家の力と権威を再びこの地の現地民に示さねばならなかった。



## 註

- (1) 政党は狩猟団、партошкияを狩猟団員と訳す。指揮者の名を  
取り「…隊」と称する場合もある。主として Kodiak 島から派遣された  
「дальная партия」と Sitka から派遣されたその周辺地域で活動す  
る「ситхинская партия」がある。
- (2) Н.Н.Волховитинов(編,ред.)История Русской-Америки 1732-  
1867.  
Т. II: Деятельность Российской-американской компании(1799-  
1825). Москва, 1999, стр.53
- (3) А.В.Гринёв, Индейцы Тинкитты в Период Русской,  
Америки(1741-1867гг.).Новосибирск,1991,стр.114-115.
- (4) А.Р.Артемов.Восстание индейцев в 1802г.в истории  
Русской Америки-Вопросы истории,1999,№3,стр.140
- (5) 原住諸民族は英語で native、ロシア語で местное  
население である。本稿でこれを現地民と呼ぶことにする。
- (6) Н.Н.Волховитинов(編,ред.)указ,соч.,стр.65.
- (7) この筆記の重大性を強調するために「Гринёв 手回し」である。  
см.Гринёв,указ,соч.,стр.65.
- (8) Н.Н.Вансгоф,History of Alaska 1730-1855, San  
Francisco,1886,p.402.
- (9) А.В.Гринёв,указ,соч.,стр.124.
- (10) Nora M. Dauenhauer, Richard Dauenhauer & Lydia  
T. Black(eds), Anóoshi Lingít Ani Ká=Russians in Tlingít  
America:The Battle of Sitka,1802 and 1804,(Sealaska Heritage  
Institute),Seattle & London,2008
- (11) *ibid.*,p. XXX.
- (12) *ibid.*
- (13) *ibid.*
- (14) しかし関連する事象 Naida-Tlingit の対ロシア同盟等近隣原住  
諸民族の関与については説明されている(口承伝承の部分以外)。  
*see,ibid.*,p. XXX III.
- (15) К.Т.Хлебников,Историческое обозрение о занятии острова  
Ситхи,с известиями о иностранных кораблях(1831г. июня  
21,Новоархангельск)°。次の書にドキュメントとして掲載された。  
本稿はこれを史料として使用。  
А.Р.Артемов.Из истории освоения русскихми острова Ситха  
(Баранова),Владивосток,1994,Документ No.1,стр.12-23.  
このテキストについては詳しくは拙書「一八〇二年の Sitka の戦  
争(1)」  
『群馬県立女子大学紀要』第三五号、十九頁註47参照
- (16) このテキストも同書の「Документ」に掲載 *ibid.*,pp.28-39.  
しかしこれは、次の書に掲載されたテキストの再録であり、少  
欠損部分がある。欠損部分は元のテキストで補填。  
Павлов,П.Н.(編,ред.)К истории Российской-Американской  
Компании,сборник документальных материалов,  
Красноярск,1957,стр.106-123.  
但しドキュメントのタイトルはこの史料集の編者がつけたと考えら  
れる。
- (17) N. Dauenhauer...*op. cit.*,p.191.
- (18) *ibid.*,pp.185-189. 要塞攻撃を語る Tlingit oral tradition に  
おけるこの章は記す。
- (19) W.W.Schmashner 氏の「The Unicorn」号船長 Henry Barber  
に関する唯一の研究書。  
Barber に関するオーストラリアの新聞「The Sydney」紙に掲載  
された(一八〇三年五月二十九日付)史料等のテキストについては  
*see,ibid.*,pp.203-209.(Aftemath of the Sitka Massacre of 1802)°  
これには彼の説明が付く。
- (20) 彼の論文は以下を参照 *see,pp.* 211-216.  
*ibid.*,p. XXX.
- (21) ロシア狩猟団を構成した native は Chugach エスキモー、  
Kodiak エスキモー、及 Aleut が中心である。この三者の各々ロ  
シア領アメリカでは Чугачи,Коягити,Aleutы と呼ばれた。今日  
言語分類上の呼称は異なるが、本稿はロシア名の英語表記である  
Chugach, Koniagi, Aleut を原則として用いる。ロシア語史料からの



- 引用で呼称を用いる場合は例外としてロシア語名を用いる。
- (22) Хлебников は①の史料と *Англичанина* と記す。  
Хлебников, указ. соч., стр. 16.  
彼はまた Sitka 近くに投锚していた二隻のイギリス船と一隻のアメリカ船から十一人の水夫が強制的に降ろされ、その内バラノフが三人雇用し、残りは Thingits(コロシ)の下に残存したことを記している。 см.там же, стр.15.  
Артемьев は [Hancock] 号から降ろされたアメリカ人五人とす。  
см.Артемьев, Восстание..., стр.142.  
Гринев は五人または七人の「англичанин」とす。加えて、彼らをロシア—アメリカ会社に雇用されたアメリカ人水夫と記す。  
см.Гринев, указ. соч., стр.253.
- (23) Артемьев, указ. соч., стр. 142.
- (24) Артемьев, там же.
- (25) Хлебников, указ. соч., стр. 16.
- (26) 要塞内にいた人々の名前や動きについては生存者 Катерина Пиннуин が証言。  
N. Dauenhauer..., op. cit., p. 187 (Eyewitness Testimonies of 1802 Survivors).
- (27) Хлебников, указ. соч., стр. 16.
- (28) там же
- (29) N. Dauenhauer..., op. cit., p. 185 (Eyewitness Testimonies of 1802 Survivors).  
Гринев は残存史料を検討し、攻撃の日付を確定するところが正確な情報不足のため困難であると結論。 см.Гринев, указ. соч., стр. 121.
- (30) Артемьев, Восстание..., стр. 143.
- (31) Thingit 側の研究者たちの攻撃日を一八〇二年六月十五日夕方と記している。 see N. Dauenhauer..., op. cit., p. XXX.
- (32) Thingit 語  $\text{ᑭᑦᑲᑦᑲᑦᑲᑦ}$  Anóoshi Lingítsh Shawxhééji, see, ibid., p. XXX.
- (33) Thingit oral traditions の地名。 ibid., p. 158.
- (34) ibid., p. 185 (Eyewitness Testimonies of 1802 Survivors).
- (35) ibid.
- (36) Хлебников, указ. соч., стр. 16.
- (37) 彼  $\text{ᑭᑦᑲᑦᑲᑦᑲᑦ}$  Плотников の証言の註 4 を参照。 N. Dauenhauer..., op. cit., p. 188.
- (38) ibid., p. 185.
- (39) ibid.
- (40) Новоархангельская крепость とも呼ばれる。
- (41) ロシアの史料も Thingit oral tradition たちの戦いとその後に関する事実については主要な点すべて一致していると Thingit 側研究者も認めている。 see N. Dauenhauer..., op. cit., p. XXX.
- (42) Хлебников, указ. соч., стр. 16.
- (43) Thingits の攻撃を受けた時の Михайловская крепость の内外の混乱の様子を生々しく語っている。即ち攻撃・ロシア側の反撃・殺されるロシア側の人々・砦の焼亡そして自らの必死の脱出・逃亡等々。  
see N. Dauenhauer..., op. cit., pp. 185-186 (Eyewitness Testimonies of 1802 Survivors).
- (44) ibid., p. 187. ロシア語  $\text{ᑭᑦᑲᑦᑲᑦᑲᑦ}$  [Видно не просто] (註 14) p. 189.
- (45) Артемьев, Восстание..., стр. 143.  
しかし一八〇三年付、Баранов の本社への死者数の報告の中に Клохтин を含められ無<sup>い</sup>。 см.Гринев, указ. соч., стр. 123. (表を参照) 生存者 Пиннуин の証言によれば、両者は砦の外にとり残られた。  
see N. Dauenhauer..., op. cit., p. 187 (Eyewitness Testimonies of 1802 Survivors).
- (46) ibid.
- (47) Хлебников, указ. соч., стр. 17.
- (48) 川の砦の中の戦いの様子は Хлебников の報告 (Хлебников, указ. соч., стр. 16-17) と Пиннуин の証言 (N. Dauenhauer..., op. cit., p. 187) を参照。
- (49) N. Dauenhauer..., op. cit., p. 187.
- (50) 砦に火をかけた人物  $\text{ᑭᑦᑲᑦᑲᑦᑲᑦ}$  は Thingit oral traditions と言及われている。

- ibid., p.162; p.168.
- (15) ibid., p.187.
- (16) ibid.
- (17) ibid., pp.187-188.
- (18) Хлебников 41の槍で刺し貫かれた人間を Plihgits が虐殺し首を切り取り書ごころ。Хлебников, указ. соч., стр.17.
- (19) N. Dauenhauer..., op. cit., p.185 (Eyewitness Testimonies of 1802 Survivors).
- (20) ibid., p.188.
- (21) ibid., p.186.
- (22) ibid.
- (23) Хлебников, указ. соч., стр.17.
- (24) Гринёв, указ. соч., стр.121-122.
- (25) Калы́ан 42本稿では以後このように登場するこの戦いの Plihgite 側の英雄。
- (26) see N. Dauenhauer..., op. cit., p. XXX.
- (27) Хлебников, указ. соч., стр.17.
- (28) N. Dauenhauer..., op. cit., p. XXX.
- (29) 註5参照。
- (30) ibid., p. XXX.
- (31) Хлебников 41の隊の1人を生き残った Бату́рин を代表させて彼の名を言及する。
- (32) Хлебников, указ. соч., стр.18.
- (33) 以下このように Plihgite oral traditions のこの事件に関する話で語られてくるのを後述する。
- (34) 「The Unicorn」号 (H. Barber 指揮)
- (35) 2人の村が Kodiak 島の村。従って両者は Koniagi と言われている。
- (36) N. Dauenhauer..., op. cit., p.186. Плогников の証言が続ごころ。
- (37) Плогников 43 Бату́рин との再会を非常に喜ぶ。 ibid.
- (38) 救出の日付は六月二二日 (七月四日)。この船が Startigavan Bay に再投錨した時と研究者は比定。この船は六月十六日 (六月二八日) に Sitka Sound に到着し、六月十九日 (七月一日) Snug Harbor に投錨。六月二二日 (七月四日) にこの場所に移動した。そこで前記の二名救出。さらに翌六月二三日 (七月五日) さらに非ロシア人の会社雇用者を救出。大部分女性。なお六月十八日 (六月三〇日) 即ち Sitka 要塞攻撃の数日後、Plihgite toion が三人のアメリカ人水夫と捕えたロシア人一人 (Thadonov) を連れて船に来たとの記録がある。(このロシア人はこの時は解放されない) N. Dauenhauer..., op. cit., p.204.
- (39) なお本稿の日付は露暦である。十八世紀は十二日を加えると西暦に戻る。この場合 ( ) 内が西暦の日付である。
- (40) Shkavulyei と Kalyan が 「Unicorn」号を訪れ捕縛される事件に「ごころ」で Плогников の証言に沿って記述する。 see ibid., p.186.
- (41) ロシア語の toion は英語では toion 又は toen。原則として toion を用いる。
- (42) 奴隷とわれ分配された。 ibid., p.188.
- (43) ibid., p.206.
- (44) ibid., p.187.
- (45) ibid., p.206.
- (46) 六月三〇(七月四日) 七月五日の三日間交換。К. Пиннуин が交換されたのはおそろしく六月三〇日。(Ebbets の船)。女の多くは Koniagi と考えられる。
- (47) ibid., p.204.
- (48) ibid., p.187. (Плогников の証言)
- (49) Артемьев, Восстание..., стр.144.
- (50) 異なる数字がいくつもある。例えば H. Barber の記述では男八人、女十七人、子供三人の計二十八人。
- (51) N. Dauenhauer..., op. cit., p.206.
- (52) ibid., pp.203-209.
- (53) ibid., pp.205-206. 以下の記述内容は煩瑣になるので以後註記しなご。
- (54) ibid., pp.205-206.
- (55) ibid., p.205.

- (84) Barber は攻撃を土曜日としている。実際は日曜日に起った。  
 (85) *ibid.*  
 (86) *ibid.*, p.206. 実際には五万ドルの代金を要求し、一万ドル相当の毛皮を代金として Баранов から得てから人質を引き渡した。  
 (87) 上のことしたる Хлебников 氏 Barber を [жидный корыстолюбивый] と評す。  
 Хлебников, указ. соч., стр. 19.  
 (88) N. Dauenhauer...: op. cit., pp. 206-207.  
 (89) *ibid.*, p. 207.  
 (90) *ibid.*  
 (91) *ibid.*, p. 208. 註 01  
 (92) Хлебников, указ. соч., стр. 19.  
 (93) 彼のことは see, N. Dauenhauer...: op. cit., pp. 211-216.  
 (94) H. Barber の後の人生のこと。 *ibid.*, pp. 213-214.  
 (95) Хлебников, указ. соч., стр. 19.  
 Гринёв, указ. соч., стр. 116.  
 (96) Visarrel'i Bay  
 (97) Артемьев, указ. соч., стр. 144.  
 (98) Хлебников, указ. соч., стр. 19-20.  
 (99) там же, стр. 20.  
 Артемьев の計算では四十六人。 Артемьев, Восстание...: стр. 144.  
 (100) Хлебников, указ. соч., стр. 20.  
 (101) Thomas F. Thompson(ed), *Наш Leel'w Nás Aaní Saax'ú: Our Grandparents' Names on the Land, Seattle & London, 2012.*  
 (Sealaska Heritage Institute, Juneau)  
 (102) *ibid.*, p. 125.  
 (103) Wallace M. Olson, *The Tlingit, Duke Bay (Alaska)*, 1995, p. 32.  
 (104) Иван Александрович Кукоков(1765-1823). А.А. Баранов の 註 10。  
 本誌で使用せる Кукоков の報告書のテキストについては註 9 を参照。  
 (105) *Kax'noowú ʔé Ice Strait ʔ ʔ Lym Canal (土流 ʔ Shilkat Inlet)*  
 の合流点近くにあり。  
 (106) А.Р. Артемьев, Из истории освоения русскихими острова Ситха (Баранова), Владивосток, 1994, (Приложение) Документ No.2, стр.28.  
*Kax'noowú ʔé Kaagwaantaan clan* の home village (氷河の拡大追われ移住)  
 (107) там же.  
 (108) там же, стр. 29. 後の現地民との抗争の経緯については стр. 29-30 を参照。  
 (109) там же, стр. 30.  
 (110) там же, стр. 31.  
 (111) 上の報告書の英訳が [Russians in Tlingit America] に所収 (section VI Ivan Kuskov Report to Baranov July 1, 1802) において Tlingit 研究の最新の成果に基づく詳細な註が付されている。本稿のこの註を参照する。  
 Павел Родионов による N. Dauenhauer...: pp. 200-201. 註 01。  
 註 01。  
 (112) Артемьев, Из истории...: стр. 31.  
 (113) N. Dauenhauer...: op. cit., p. 201. 註 1. Burachon の別名 foolligan or condl fish.  
 (114) Артемьев, Из истории...: стр. 31.  
 題名 Иван Неचाев ʔé Kax'noowú ʔé 滞在したこととあり 匪者を知らしめる。  
 (115) N. Dauenhauer...: op. cit., p. 201. 註 9.  
 (116) *ibid.*, p. 201. 註 19.  
 (117) Артемьев, Из истории...: стр. 32.  
 (118) N. Dauenhauer...: op. cit., p. 201. 註 1.  
 (119) Артемьев, Из истории...: стр. 32.  
 (120) там же.  
 (121) там же, стр. 32-33.  
 (122) N. Dauenhauer...: op. cit., p. 201. 註 23.  
 (123) Артемьев, Из истории...: стр. 33.

- 「Частые острова」は現在の Salisbury Sound を指す。  
see, N. Dauenhauer..., op. cit., p. 201. 註47.
- (123) Артемьев, Из истории..., стр. 33.
- (124) там же.
- (125) [Один благодетельный какой-то колложский обитатель] (善い親切な Tlingit 住居) там же.  
彼の筆名は Хлебников の記述より少し異なる。  
см. Хлебников, указ. соч., стр. 20.
- (126) Артемьев, Из истории..., стр. 34.
- (127) The katnai toion Осиш が動揺する狩獵団員を励ました。  
там же.
- (128) N. Dauenhauer..., op. cit., pp. 201-202. 註61.
- (129) Артемьев, Из истории..., стр. 35. Федор の件も同じ頁参照。
- (130) Харгейк は ロン ト 語 の 名 詞 'Tlingit name が 比 定 せ ら れ る 場 合 は 併 記 せ ら れ る。』 の 場 合 は 未 だ 推 定 せ ら れ ぬ。  
N. Dauenhauer..., op. cit., p. 202. 註64.
- (131) *ibid.*, 註65.
- (132) 川の 旅 と 南 部 の 村 の 集 合 地 について。  
см. Артемьев, Из истории..., стр. 36.  
荒地 (Тукимаа) は Daikekeena の 名 称 で 呼 ば れ て いた。  
川の 名 称 は Haida 語。Haida 居住 地。  
N. Dauenhauer..., op. cit., p. 202. 註66.
- (133) 川の 地 名 について 不 明。  
see, N. Dauenhauer..., op. cit., p. 202. 註68.
- (134) *ibid.*, 註40.
- (135) Артемьев, Из истории..., стр. 36. 以下の 計 画 の 根 拠 は 不 明。
- (136) N. Dauenhauer..., op. cit., p. 202. 註49.
- (137) Артемьев, Из истории..., стр. 36-37.  
там же, стр. 37.
- (138) N. Dauenhauer..., op. cit., p. 202. 註49.
- (139) Артемьев, Из истории..., стр. 37.
- (140) 川の 手 紙 は 未 発 見。N. Dauenhauer..., op. cit., p. 202. 註47.
- (141) Артемьев, Из истории..., стр. 37.
- (142) The Katnai は Alaska 半 島 の 南 東 岸 に 在 る。Shelikov Strait を 挟 む 川。Kodiak 島の 北 岸 に 在 る。原 住 民 族 は Kodiak 島の 住 民 と 同 族 Koniagimut.
- (143) Артемьев, Из истории..., стр. 37-38.
- (144) там же, стр. 38.
- (145) там же.
- (146) 現代 の Tlingit 研 究 の 基 礎 を 成 す とい っ て も 可 い が, Federica de Laguna の 一 連 の 研 究 で 在 る。その 最大 の 成 果 が 次 の 研 究 報 告 書。  
Federica de Laguna, Under Mount Saint Elaias: the history and culture of the Yakutat Tlingits, part1-3, city of Washington, 1972.
- (147) N. Dauenhauer..., op. cit., ( 語 の 中 に Andrew P. Johnson) Part One, pp. 157-166. Part Three, pp. 167-169.
- (148) N. Dauenhauer..., op. cit., pp. 162-164 (Part One), p. 168 (Part Three)
- (149) *ibid.*, p. 162.
- (150) *ibid.*, p. 168.
- (151) К. Т. Khlebnikov, Baranov: Chief manager of the Russian colonies in America, Kingston (Canada), 1973, p. 39.